

龍谷 Ryukoku



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

2015 No.79



01 P01 Feature Article 巻頭特集 学長対談

自分の言葉で
世界を捉える力を
高村 薫 さん × **赤松 徹真** 学長

02 P06 5 長 News

第5次長期計画第1期中期計画 総括
文学部、社会学部改組
ラーニングコモンズがオープン

03 P10 People, Unlimited

車いすフェンシングでめざせ、東京パラリンピック
藤田 道宣 さん 大学院実践真宗学研究科

P12
People, Unlimited
瀬田キャンパスに光のアート
独学で創りあげたプロジェクション・マッピングに歓声
倉地 優輝 さん、**大塚 健司** さん 理工学部

P14
People, Unlimited
台湾学生運動取材映像で
映像コンテストグランプリ受賞
西村 紗帆 さん 法学部

04 P16 Education, Unlimited

人の倫理観が磨かれる、
遺伝子研究の世界
岡田 清孝 教授 農学部就任予定

P20
Education, Unlimited
マンガ研究が
国際的な人材と視点を育む
杉本 バウエンス・ジェシカ 講師 国際文化学部

05 P24 World, Unlimited

龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター：
フランス国立図書館所蔵の「ペリオコレクション」
科学分析アーカイブ公開

06 P28 Ryukoku Event

隠れた修験道美術、現る
石川 知彦 龍谷ミュージアム副館長・学芸員
村松 加奈子 龍谷ミュージアム学芸員

P30
Ryukoku Event
食の循環トークセッション
多文化共生トークセッションほか
P31
第12回 青春俳句大賞

07 P32 News & Topics

最新情報

08 P38 People, Unlimited 龍谷人

20 の資格を持つ
よしもと芸人
市川 義一 さん 漫才師「女と男」

P40
People, Unlimited 龍谷人
紙芝居ライブでつながる
笑顔と夢
持田 陽平 さん 新感覚紙芝居「よしととひうた」

P42
People, Unlimited 龍谷人
ラオスでの活動を通じて
世界の可能性の格差を埋めたい
好岡 利香子 さん

09 P44 Ryukoku News

学長・新学部長紹介

10 P46 Book Cafe

新刊紹介

01 | Feature Article

巻頭特集 学長対談

自分の言葉で 世界を捉える力を

作家

高村 薫

×

龍谷大学学長

赤松 徹真



重厚な文体で人間の精神を捉えた作風と、鋭い社会批評で支持を集める、作家の高村薫氏。2006年には『新リア王』で親鸞賞（本願寺文化興隆財団による）も受賞された。

母方が真宗寺院の出で、本堂が遊び場だった。「でも母はまったく信心深くなくて」と語る高村氏、しかし震災を経験して、人間にとっての宗教の意義、仏教哲学の価値を痛感したという。そんな高村氏が見つめる、現代の日本社会とは、学生達とは。

高村氏と赤松学長が、大宮学舎本館で語り合った。

複雑さを操れる人材が、社会を牽引する

赤松 今、経済が曲がり角にさしかかって、世界の基軸が移っていく不安定な時代と言われています。そんななか、次の時代を担う若い世代へ伝えていくべきことが見通しにくくなっていますが、高村先生はこのあたり、いかがお考えでしょうか。

高村 私は近代の遺産をたっぷり学ぶことができた最後の世代でした。大学に入ったときは、世の中には賢い人がいっぱいいて、自分の一生ではとても吸収しきれないような知識があふれているのを知ってめまいがしました。ですから4年間、人類が積み重ねてきた言葉や知見を、自分の許す限りの能力で吸収しようと思いました。学生とはそういうものでした。

今の若い人達は、インターネットの影響で知識や情報との接し方が変わってきました。情報は吸収するものではなく、必要なときに必要なだけ検索して取りに行ってもコピーするものになってしまっただけで、手当たり次第に本を読むとか、身体的な経験をするとか、そういうことが少なくなった気がしますね。そうすると蓄積ができない。世界を眺めるときに、自分の言葉、自分の目、自分の身体で、世界とはこういうものだというふうに捉えることができなくなります。とりえず興味のあること、必要なことなど、断片でしか世界を捉えることができない。本当は、なかなか答えが出ないのが世界というものだと思うんですが、みんなすぐに解決方法を求める。人間が複雑、世界が難解であることに耐えられない。明らかに近代の人間とは違う、新しい人類の世の中になってきましたね。

赤松 複雑さに耐えられないということは、思考・思索・悩みに耐えられないということでしょうね。逆に、複雑な位置にある語彙を、極端に二分化してどちらかに振って表現したり、どちらかに同調していく態度をとるという方向にあるように思えます。複雑な利害関係や社会の仕組みを、どう考えていくべきか、腰を落착けて考え抜ける場所がなかなかない。

高村 社会で生きていくには損得や利害が絡んできますが、そういったものの抜きにひたすら学ぶことのできるのが大学時代です。大学は今、なにかと実社会と結びつこうとする…資格取得を応援したりしますよね。それはむしろもったいない気がします。社会人になってからやればいいことだと思うんです。

赤松 本学も、就職活動や資格取得を推進しているところがあります。4年間と言っても、大学教育のデザインと質が揺らいでいるところがありまして、単位の取得でしたら3年まででおおよそで

きてしまいます。4年間の学位のプログラムをどう充実していくのか、提供していく側も、学生自身も、問われていますよね。

高村 今、いろんな格差が問題になっていますが、大学で何を学んだかという格差も、リーダーになって社会を牽引していく人と、使役される人を分けていくんだらうと思います。うまく実社会に適応するためのあれこれ…資格などを身につけて就職していく人が社会のトップになるかという、そうではない。グローバルな世界で勝ち抜いていける人間というのはおそらく、大学で質の高い教養をしっかりと身につけた人だと思うんです。例えば言語能力が低い人は、目の前にある何かを説明することができない。言語能力が備わっている人は、表現することができる。その差は、人生の立ち位置を分けます。

赤松 そういう点では大学教育の現場でも、おっしゃるような、そもそもの学びの喜びや動機を改めて見直していく必要がありますね。本学は367年前の江戸時代の初め、鎖国令が出された年に始まり、その後江戸から明治になり、政治の仕組みも変わり、戦後を迎え、学校の仕組み自体も大きく変わってきました。時代の流れを目の当たりにしながら、どう向き合っていくかをつねづね意識して変革しているのですが、その大きなうねりのなかでも、浄土真宗の精神を建学の精神とし、人間のあるべき姿を見失わないように、継承してきています。変動する社会のなかで、今後もそれを基盤とし、緊張感をもって見つめていきたいと思っています。

農と食物のあり方、食生活のあり方を、見直すべきとき

赤松 本学は今年の4月から、滋賀の瀬田キャンパスに農学部を新設します。「農学部」という学部名称でいうと、国内の大学では1980年以降新設がなく、35年ぶりになります。この35年…バブル崩壊し高度成長が終焉して以後の日本を見たときに、地域社会も「農」をめぐるかなり変貌していますので、それらを踏まえつつ、持続可能な社会の実現に貢献しうる学生を育成したいと思っています。

高村 私も最近、目を向ける方向が完全に、足元の「土」になっています。今、「新潮」という小説誌で連載しているのも、まさに農家の話です。奈良の山間地域の大字陀という地域が舞台で、棚田でお米を作りながら野菜作りもやっているような。私も全くの素人ですが、農業というものを一から眺めてみると、本当に面白いですね。土のなかの微生物の働き、水の働き、植物の根の働き、そこにいろんな動植物がいて、まさに命と向き合う。観念ではなくて、身体で、人間の生きるということそのものと密接に結びついています。それが私が今一番関心のあることなんです。農学部新設には共感します。

赤松 大字陀は私の故郷ですね(笑)。農学部には4学科ありますが、どの学生も、作付けから収穫までを体験的に学修する農業実習が必修です。例えば食品栄養学科ですと、データ分析やカロリー計算をすることが多いんですが、彼らも植物を育てていく。土に触れる時間を持ち、どういうプロセスで作物が育てられているのかを理解し、それを土台に学んでいきます。



高村 薫 たかむら かおる 作家。

1953 年大阪市生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。商社勤務を経て、1990 年『黄金を抱いて翔べ』で日本推理サスペンス大賞を受賞しデビュー。1993 年『リヴィエラを撃て』で日本推理作家協会賞、日本冒険小説協会大賞、『マークスの山』で直木賞を受賞。1998 年『レディ・ジョーカー』で毎日出版文化賞、2006 年『新リア王』で親鸞賞、2010 年『太陽を曳く馬』で読売文学賞。重厚な作風で人間の深部を見据える。

高村 最近の日本の食生活は、やりすぎなほど多彩です。でもよく見つめてみると、例えばとても美味しそうに見えるデパ地下のショーケースの中のサラダ、確実に自然のものだけではなく、いろんな添加物が使われている。私は逆に、これからはもう少し食生活をシンプルにしていきたいと思いますね。つまり、栄養や安全や、地産地消に優先順位をおいて食をまわしていく。そのためには、添加物をなるべく使わないで済むような食のあり方、あるいは輸入食品に頼らなくて済むようなあり方…野菜まで輸入しなくていいんじゃないかなと思うわけですよ。過剰すぎる食物のあり方と人間の食べ方を、もう少し組み立て直すべきだと思います。

赤松 四季にあわせて作物の旬がめぐる、それが日本の歴史を創り、食文化を創ってきた。食材は地域ごとの気候にぴったりのものを、自分達で作っていたわけですよ。流通も、可能な一定の範囲でしかなかった。ところが工業化、産業化して、流通にも限界がなくなり、極端なものでは、植物工場みたいなハウスもありますね。でもその植物工場を作るにも、かなりの電力エネルギーを費やさないと立ち行かないそうです。

高村 消費者がそれを望むから、農家の方もわざわざ重油を焚いてハウス栽培をなさるんだと思うんですが、日本人全体で、そういうことを少し見直すべきだと思いますね。そうすると、時間をかけて手づくりするということに、価値が移っていくかもしれません。そして、やっぱりそれを導くのは、教育だと思うんです。畑で抜いたばかりの人参やきゅうりなど、穫りたてのものを一度でも召し上がったら、いくら若い学生さんでも、目が覚めるでしょう。「あ、こんな味をしてたんだ、こんなに美味しいんだ」と、きっと気づいてくれるんじゃないでしょうか。

外に出ていく前に、語るべきことを身につける

赤松 グローバル人材の育成が急がれる昨今、本学でも本年4月にこれまでの国際文化学部を移転・改組し、深草キャンパスに「国際学部」を設置します。国際社会と向き合える学生像をつねづね議論していますが、高村先生が考えるグローバルな人間とは、どのような人ですか。

高村 私は、ビジネスであれ、外交であれ、学問であれ、一番の基本は、その人物が語るべきことを持っているかどうかだと思うんですね。言葉がペラペラとかではなくて、ビジネスなら、相手に何を売りたいか、それはどういうものかを語れること。外交なら、語るべき方針を持っていること。「語るべきことを持つ」ということは、外に行って学ぶということではありません。まず日本で、語るべきことを身につけて、外に出ていくということです。

たとえ自国の文化に造詣が深くなくても、まずは自分がしっかり相手と商売ができるようなものを持つこと。その傍らで、文化の話ができれば、それに越したことはないと思いますが。言葉は拙くてもいいと思うんです。

赤松 大学はつい、語学能力に焦点を当てやすいところがあっ

て、すぐ今の社会に、数値的・符号的に合わせようとするわけですが、先生がおっしゃったように「外でこれを語りたい」という自発性を促すものを、どういうふうに培うかということも重要ですね。本学では、「ラーニングコモンズ」という新しい環境で、日本人も留学生も交流的に学べるスペースを整えたり、留学生と共同生活できる寮を設けたりしています。互いに刺激をうけ、目標を明確にできるような環境づくりをしたいと思っています。

高村 海外の方と交流して一番面白いのは、自分が想像もしていなかったような発想や、日本では絶対触れることがない異質なものとのお会いです。それに驚き、ひょっとしたら興味を持って、自分の新たな学びが始まるかもしれない、それが一番の醍醐味ですよ。そういうことが、日本にしながらできるというのは、学生さん達はとても恵まれていると思います。

仏教、宗教を学んだか否かは、いずれ人間力の差となる

高村 龍谷大学にせっかく入ってこられる方には、ぜひ仏教を勉強してくださいと言いたいです。阪神淡路大震災や、東日本大震災を通して、理屈や科学で解決できない人間の現実があると思いました。お金で解決できないことの最たるものが人間の生き死にです。災害だけではなく、紛争問題でも、突然の死があります。理屈では解決できないことに直面したときに、最後に頼っていけるのは、宗教です。せっかく仏教を勉強する場が与えられているわけですから、勉強しない手はありません。信心に行き着くか否かは別として、その前に、仏教は書物で学ぶことができる部分が非常に大きい哲学ですよ。これを学んで何になるとか、知識をどうするかとか、そういうこと抜きに、仏教、宗教に少しでも近づくことをなされば、社会に出て財産になります。宗教を学んだ人と学んでない人とは、これも人間的に大きな差ができてくると思うんです。

赤松 本学では1年生で仏教の思想を必修で学べます。卒業生からは、40代や50代になって、学生時代に学んだ仏教の知識の一端が活きたという話を聞きます。高校までではなかなかそういうことは学べませんので、大学時代、一番知識を吸収できるときに、触れておいてほしいと私も思いますね。

高村 また、大学の講義に限らず、関係する本を積極的に読んで、疑問を積み重ねておくべきだと思いますね。いろんな分野を勉強してどれだけわからないことを作るかです。それが学ぶ力になります。わからなかったことは記憶に残りますから。難しいことに挑戦して、世界の把握のしかたの土台を、しっかり作っていただきたいです。

赤松 私もいまだに、難しく読めなかった本が書棚に並んでいます。でもそれが人生でいつもどこかにひっかって、手がかりになって、あらたな出会いや気づきを与えてくれたり、学びの意欲をもたらしてくれています。本学も学生達に、学問と向き合う謙虚な姿勢や醍醐味を伝えられる大学でありたいものです。



赤松 徹眞 あかまつ てっしん（龍谷大学学長）1949年奈良県宇陀市生まれ。龍谷大学大学院文学研究科修士課程修了、龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。（文学修士）1984年龍谷大学文学部講師、1987年龍谷大学文学部助教授、1998年龍谷大学文学部教授、2005年龍谷大学教学部長、2007年龍谷大学文学部長、2011年4月学長に就任、現在に至る。専門は日本仏教史、真宗史、近代史。

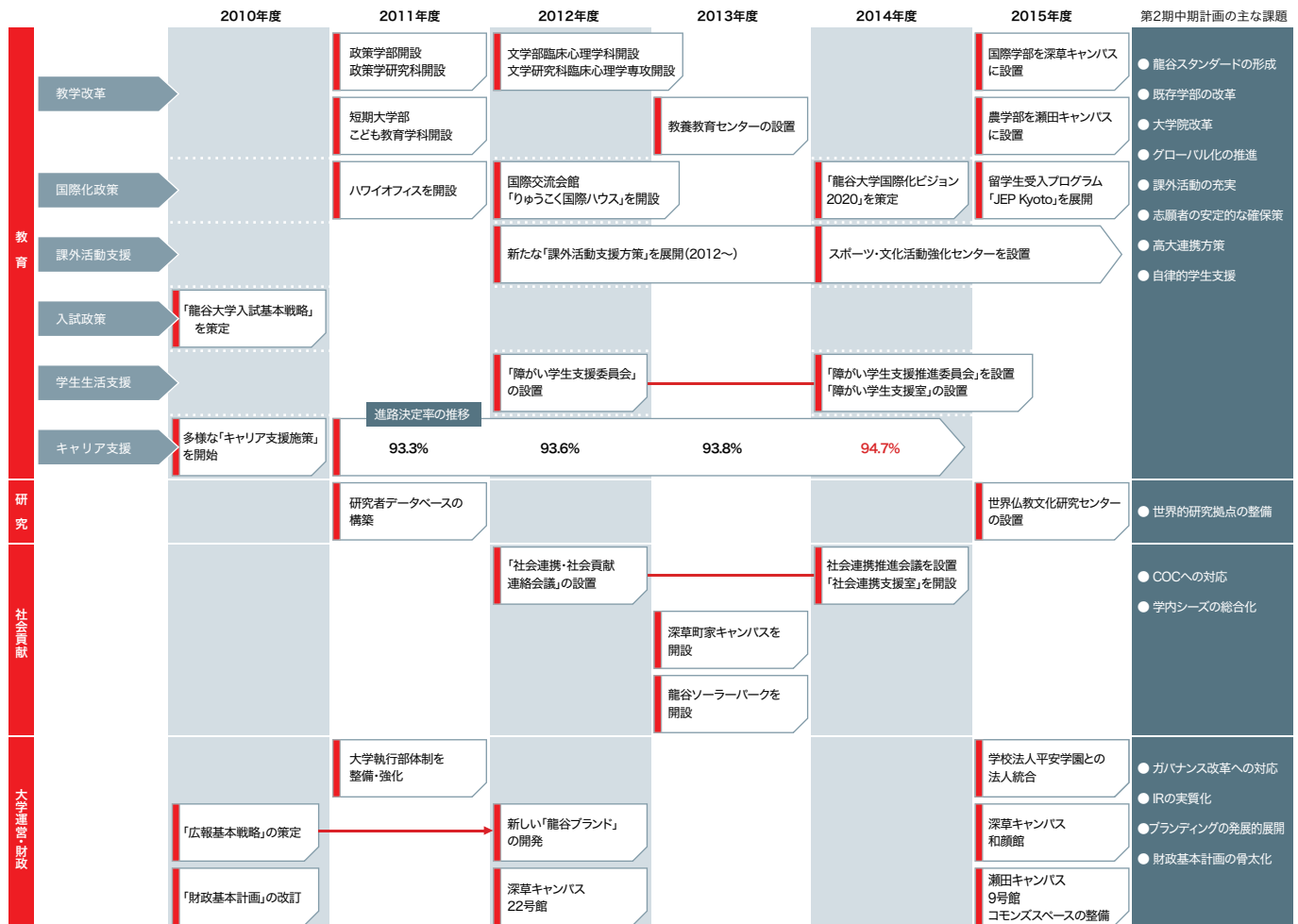
第5次長期計画第1期中期計画 総括

第5次長期計画(2010-2019年度)は、1期5年の中期計画を2期にわたって展開する中長期計画方式を採用しており、前半期事業である第1期中期計画(以下、「第1中計」という)は、2014年度で完了することとなる。

第1中計では、大学の役割を「教育」「研究」「社会貢献」の三つに区分。これを実行する機能として「大学運営」「財政・施設・整備計画」の二つの要素を加味した五つの分野から、全学で55の事業を展開した。事業推進にあたっては、着実に成果を創出していく観点から進捗管理に留意したプロジェクト・マネジメントに取り組んだ。その結果、進捗の見られない、あるいは実施展開が難しいと判断し、中止や執行部預かりとなった事業や、計画・立案段階に留まった事業など、成案化するに至らなかった事業もあったが、約8割の事業が実施展開された。

代表的な事業としては、国際文化学部を深草キャンパスへ移転・改組し、新たに「国際学部」を設置する事業や、瀬田キャンパスに「農学部」を新設する事業、ロゴマークやスローガンなどを一新した「龍谷ブランド」の開発、全国初となる地域貢献型メガソーラー発電所「龍谷ソーラーパーク」の設置などがあげられる。また、そのほかにも深草キャンパス、瀬田キャンパスでの新棟建設や、学生の自主的な学修を支援するスペースとしてのコモンズ機能の充実、グローバル化する時代に対応した「国際化ビジョン」の策定など、多様な事業を展開した。

第5次長期計画第1期中期計画 主な事業



2016 年4月、文化遺産への関心の高まりを背景に、文学部歴史学科に「文化遺産学専攻」を設置予定

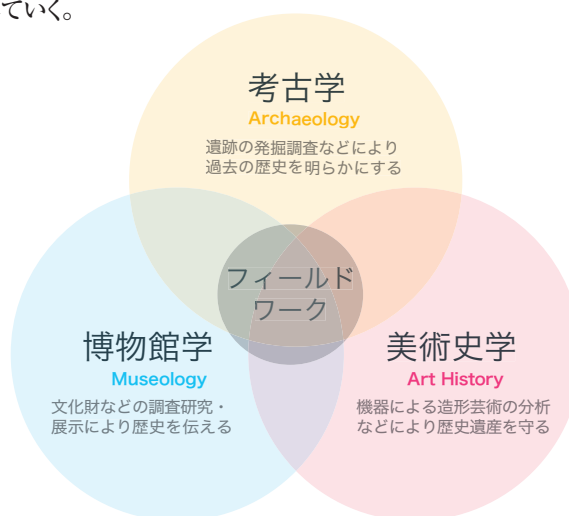
2016年4月、文学部歴史学科に新たに「文化遺産学専攻」を新設し、今までの「日本史学・東洋史学・仏教史学」3専攻から4専攻となる。

新専攻の入学定員は44名。取得可能な資格は、博物館学芸員、図書館司書、中学校教諭一種免許(社会)、高等学校教諭一種免許(地理歴史)、本願寺派教師など。

文化遺産学専攻は、文化遺産の歴史的意義を考え、将来へと守り伝えるための技術と方法を習得し、建学の精神を体現した感受性の豊かな専門家の育成を教育目標とする。

特色の一つであるフィールドワークでは、遺跡や寺院など文化遺産の調査を通じて文化財を研究し、博物館などでの活用についての専門教育をおこなう。また東日本大震災以降、課題となっている文化財の修復についても専門技術の課題を明らかにし、習得者の育成に努めていく。これらに対応できる機関は一部の研究機関に限られており、大学でおこなうところはめずらしく、保存と保管法についての専門的技術の習得者を育成することは新専攻の特性といえる。

本専攻は「物(もの)から学ぶ」、「物(もの)を残す」、「物(もの)を活かす」の三つのキーワードで、考古学、博物館学、美術史学(建築史学)を基礎として、京都という文化遺産が豊富な地の利を活かした文化遺産の活用を体験できる魅力的な専攻にしていこう。



2016 年4月、複雑化した現代社会に望まれる福祉人材育成をめざして、社会学部に「現代福祉学科」を設置予定

2015 年設置届出予定

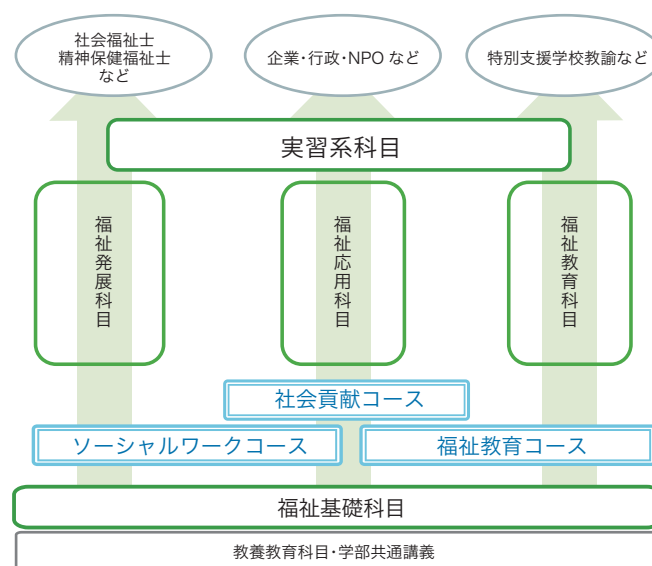
現代社会の要請に応える専門性の高い福祉人材養成のため、2016年4月に社会学部の「地域福祉学科」と「臨床福祉学科」を統合し、「現代福祉学科」を新設する。

入学定員は180人。主な取得可能な資格は社会福祉士国家試験受験資格、精神保健福祉士国家試験受験資格、特別支援学校教諭一種免許など。また福祉現場に限らず、多様な分野で専門知見を活用した支援や社会貢献ができるような人材を送り出していく。

これまでも本学は社会福祉分野への就職率が高く、高い評価を受けている。現代の福祉問題は、家族や地域関係の変容、経済状況の悪化などで、より複雑となってきた。さらに社会福祉の現場においては、国内在住の外国人問題への対応や国際的支援実践の要請、途上国支援のソーシャルビジネスを展開するNGOとの協働など、グローバルな視野を持つ人材が求められてきている。

「現代福祉学科」はこのような時代状況に対応できる福祉人材を育てるため、教育資源を充実し、現場を意識した実習を強化(講義・演習・実習の循環的カリキュラムを編成)し、理論と実践の相乗的学習をおこなう。

福祉を起点に「人とつながり、社会をつなげる」共生社会を創出し、社会貢献を視野に入れた人材育成をめざしていく。



(コース=履修モデル)



多様な学びの空間 龍谷大学ラーニングコモンズがオープン

1号館跡地に2013年3月より建設を進めてきた新棟「和顔館（わげんかん）」が、2月2日に竣工した。和顔館は、「第5次長期計画」の重点施策の一つである「国際学部の深草キャンパス移転」において必要となる研究室や教室などを整備するとともに、学生の主体的な活動の支援や多文化共生キャンパスの実現などに資する新棟として建設した。建物名称には、「穏やかな笑顔で人と人が出会う場所」という意味を込めている。

深草キャンパスは、「国際学部の深草キャンパス移転」により、学生規模が約12,000名となることから、深草キャンパスに在籍する学生の学修環境のさらなる充実が必要となる。そのため、同館には多様な学びに対応する教室のほか、図書館機能を整備するとともに、学生の主体的な学びを支援する「ラーニングコモンズ」を設置。ラーニングコモンズは、「スチューデントコモンズ」「グローバルコモンズ」「ナレッジコモンズ」の三つの機能を有しており、これらを活用して学生の主体的な学びや活動を支援していく。ラーニングコモンズを中心に、和顔館の施設を紹介する。



龍谷大学ラーニングコモンズは、学生の主体的な学びを支援する学修環境として、多様な学生が集うことのできるユニバーサルな場を提供します。深草コモンズは、これまでのラーニングクロスローズ、インターナショナルラウンジ及び図書館グループ学習エリアを発展させた空間として、和顔館に開設します。



スチューデントコモンズ (Student Commons)

1階西側のスチューデントコモンズでは、学生の主体的な学びを実践する場として、個人・グループで学習ができるコラボレーションエリア、学修支援・メディア機器の貸出・技術サポート支援が受けられるクリエイティブエリアのほか、学生企画のワークショップや成果発表会等のイベントを行うことができるアクティビティホール等を整備。



ナレッジコモンズ (Knowledge Commons)

図書館地下1階を中心に、学術情報を積極的に活用しながら学びあえる「ナレッジコモンズ」を配置。オープンスペースでは、学生が可動式の机などで空間をデザインしつつ自由に学ぶことができる。グループワークルームは、壁面ホワイトボードを完備しており、グループ学習などに活用することができる。



グローバルコモンズ (Global Commons)

1階の東側には外国語の学習や異文化交流を目的とした「グローバルコモンズ」を配置。スピーキングブースや個人ブースを設置したランゲージスタディエリア、プレゼンテーションなどをおこなうことができる開放的なマルチリンガルラウンジなど、多様な学修形態に対応できるスペースを整備した。



講義室

ワークショップ形式、グループ形式などに対応し得る教室や、多様な教育ニーズに対応できる多彩な教室を設けている。450人規模教室では、国際シンポジウムにも対応できる同時通訳ブース、講演者控室を整備。キャンパスの国際化を推進するとともに、学会や講演会などでも活用していく。



図書館

地上3階地下2階からなる図書館は、既存の8号館と連結しつつ、充実したスペースと快適かつ利便な学修環境を実現した。また、ナレッジコモンズも含め、フロアごとのゾーニングを図り、かつ多彩な閲覧席を設けることで、多様な利用方法に対応可能となっている。



震災復興のモニュメントを設置

本学学生が東日本大震災のボランティア活動で磨いた宮城県石巻市雄勝町名産の「雄勝石」を、地下2階中庭の床材として使用しており、本学と被災地との絆をあらわしている。また震災を語り継ぐモニュメントとして活用していく。

03 | People, Unlimited

車いすフェンシングで めざせ、 東京パラリンピック

藤田 道宣さん

大学院実践真宗学研究科2年

たった10秒で勝敗が決まることもあるという。激しい剣さばきとスピード、それが車いすフェンシングの見どころだ。ルールは健常者のフェンシングと同じだが、決定的に異なるのは“逃げ場”がないこと。ピストと呼ばれる装置で車いすを固定して競技するため、選手は前後に距離をとって防御することができない。剣を使った攻防だけで勝負するため、片時も集中力を切らすことは許されず、見る者は鋭い気迫に圧倒される。剣の舞う速さは素人の目には留まらないほどだ。藤田道宣さんは、高校でフェンシングを始め、高校3年でインターハイ出場、大学1年ではインカレベスト8や全日本選手権ベスト16を勝ち取るほどの実力の持ち主だったが、大学2年の夏に事故で頸椎を損傷。少年時代からスポーツ一筋できた藤田さんだからこそ、歩けなくなるということにずいぶん落ち込んだという。そんなとき、先輩に紹介されて始めたのが車いすフェンシングだ。

「高校までの経験が役に立つかという逆ですね。自由に動けた頃のイメージが頭や体にインプットされているのに、

その通りには体が動きません。そのギャップがしんどい。むしろ障がいを持ってから始めた人の方が、スムーズに競技に慣れることができるみたいです」

競技を始めた当初は、剣を握ることも、上体をまっすぐ保つことも難しかったという。そこからトレーニングを積み重ね、筋力をつけた。車いすフェンシングならではの動きも一から体に叩き込んだ。そして2010年にアジアパラリンピック広州大会に出場。その後も毎年ワールドカップなど国際大会に出場。2014年のアジアパラリンピック仁川大会ではベスト8に入り、年々世界ランクの順位も上げてきている。

「昨年からすでに2年後のリオ・パラリンピックの予選が始まっていて、今年もフランスやドイツ、ポーランドなど様々な大会に出場予定です。リオで良い成績をあげて、東京五輪をめざしたいですね。今では海外の選手ともすっかり顔なじみになって、みんな仲が良いんですよ。英語は苦手だったけど、今ではメールのやりとりもよくしています。ライバルでもあるけれど、技術を教えてもらったり一緒に練習したり、同志という感じ。みんなの姿に自分



も励まされて、自分もがんばる力がわいてくる。それは障がいを持つまでわからなかった面白さですね」

障がいを持ったことで、人生が一変した藤田さん。しかし、障がいを持ったことで視野が広がり、成長できたこともたくさんあるという。

「一人では生きていけなくなって、周囲の人に支えられているということに気がつくことができました。僕は家がお寺なので大学院で真宗学を学んでいますが、障がいを持ってからはビハラー活動も真剣に取り組むようになって、東北の仮設住宅を訪問したり、ケア病棟で末期がんの方とお話しさせていただいています。僕は家族や周りの人の支えによって絶望から立ち上がることができた、その経験があるからこそ、わかりあえる気持ちもあると思うのです。将来は人々の苦悩に寄り添える活動がしたいです」

きつい練習に藤田さんの顔が何度も歪む。思い通りに動かない体に怒りがわいてくることもある。それでも趣味として楽しむスポーツよりも、自分自身に挑戦し続ける競技スポーツを選んだ。

「僕にはフェンシングしかない。障がいを持ってからの第二の

人生をフェンシングが支えてくれました。それができるように支えてくれた人への恩返しは、フェンシングで結果を出すこと。だから何がなんでも結果を出して、お礼が言いたい」

車いすフェンシングが盛んな欧米では、健常者の練習場にはたいてい車いす用の設備も併設されているそう。健常者も障がい者も変わりなく一緒に楽しめる、まさに騎士道精神にあふれたフェアなスポーツである。一方、日本ではまだ車いすフェンシングは黎明期にある。設備の整った練習場所はほとんどなく、試合前は指導者である小松真一さんが経営する京都市内の写真スタジオにピストを設置し、そこに通って練習をおこなうこともある。ちなみに海外遠征は、指導者も選手も実費で参加しているというから、その負担は相当なものだろう。車いすフェンシングは日本では京都が発祥であり、選手や協会も京都が中心だ。昨年末にようやく京都駅近くに常時練習できる場所が開設され、今後は全国各地、そして世界から様々な選手が集まってくるという。東京五輪を楽しみに、地域ぐるみで応援したい。

03 | People, Unlimited

瀬田キャンパスに光のアート 独学で創りあげた プロジェクション・マッピングに歓声

倉地 優輝 さん
大塚 健司 さん

理工学部
情報メディア学科3年

昨年の8月30日、瀬田キャンパスに夕闇が訪れる頃。礼拝堂「樹心館」に浮かび上がった美しい映像に、集まった人々から歓声が上がった。新しいナイトエンターテインメントとして話題のプロジェクション・マッピングとは、建築や家具などの立体物をスクリーンにして映像を投影し、シンクロさせる映像手法だ。その際、スクリーンとなる対象の寸法と映像の寸法をびたりと重なり合うようにすると、映像の動きや変化によって、あたかも建物が動いたり、光を放ったように感じさせることができるが、立体物の凸凹をコンピューターで計算して映像を加工するという、高度な技術が必要である。この技術を1年かけて独学し、プロジェクション・マッピングを成功させたのが倉地優輝さん、大塚健司さんのコンビである。

興味のあるものがお互い似ており、入学当初から気が合ったという二人。2年生になって何か自主的な活動をしてみたいと思った倉地さんが、以前見たプロジェクション・マッピングに感動したことを思い出し、大塚さんに「一緒につくってみないか」と声をかけた。そこからプロジェクトが始まった。もともと動画編集やカメラが好きだったという二人も、プロジェクション・マッピングがどのようなにつくられているのかは、さっぱりわからなかったという。

倉地 まずにはネットで調べまくったり、本を読んだりしてみたものの、まだ新しい技術なので情報があまりないのです。そこで、思いきって、東京でおこなわれたワークショップに参加して手ほどきも受けました。それでもやっと基礎がわかったくらい。どうせなら見た人を感動させられるレベルのものをつくれるようになりたい、と冬休みも春休みも返上で試行錯誤しながら勉強しました。その時は大学でやらせてもらえるなんて夢のまた夢でしたね。

大塚 それでも少しずつ複雑な動きが表現できるようになってきて、はじめて5カ月くらいで「これはいけるかも」と手応えを感じられるようになりました。そこで思いきって、大学で投影させてほしいという企画書をまとめ、先生方へプレゼンテーションをしたのです。すると僕達のゼミの指導教員である岡田至弘先生が「そこまで思いがあるならやってみなさい」と賛同してくださり、大学での投影が実現することになりました。

投影が決まってから制作期間はたった1カ月。睡眠時間を削っての制作がスタートした。

大塚 ちょっとでも窓枠と映像がズレたりしたら、せっかくの映像が台無し。樹心館の正確な寸法とパソコン上の寸法が合うよう



に、何度も何度も微調整を繰り返すのが大変でしたね。

倉地 最後のテスト投影できれいに映像が流れていくのを見たときは、我ながらこみ上げてくるものがありました。本来、プロジェクション・マッピングって、プロでも多くの人が分業しておこなうもの。それを、たった二人でよくやったなと感慨深かったですね。

音楽にあわせて映し出されたのは、1885年に大阪南警察署の庁舎として建築された『樹心館』が瀬田キャンパスに移築され、図書館、そして現在の礼拝堂として愛されるようになるまでの129年間を描いたストーリー。映像と建物がぴたりと合い、まるで樹心館が生きているかのように躍動。多くの学生が、楽しい映像と初めて知る樹心館の歴史に心を打たれていた。二人のプロジェクション・マッピングは大成功。その活動はすっかり話題になり、さっそく龍谷祭でも作品を作ってほしいとの依頼が舞い込んだ。今や学外からのオファーも来ているという。

倉地 制作はもちろん、企画書をつくったり、プレゼンをしたり、人集めのためのビラ配りまで自分達でやりました。そうやって一から全部自分でつくりあげたのは初めてのこと。実現できたのは大きな自信になりました。

大塚 僕達の映像を見た人達が、TwitterやFacebookに「きれい」「感動した」などと、たくさんの感想をアップしてくれてすごく嬉しかったです。やりたいという気持ちだけで終わらせなくてよかったと、心から思いました。

今後は人の動きに反応して変化するインタラクティブな映像なども手掛けてみたいと、さらなる技術の向上をめざす二人。残り1年の大学生活、青春の挑戦はまだまだ終わらない。



倉地 優輝さん 大塚 健司さん

動画はこちらから見るができます

<http://www.ryukoku.ac.jp/news/detail.php?id=6116>

03 | People, Unlimited

台湾学生運動取材映像で 映像コンテストグランプリ受賞

西村 紗帆さん

法学部4年生

龍谷大学映像コンテスト2014

グランプリ受賞チーム「台湾西倉組」

共同通信台北支局の一室のテーブルを囲んで、若者達が真剣に意見を交わしている。台湾人の学生と、日本人学生…龍大生達だ。台湾学生が龍大生に疑問を投げかける。「日本の大学生は政治をどう思っているの?」。どう答えたら良いのか。言葉を選ぼうとする日本人学生達の表情も、強い信念を持った様子の台湾学生のたたずまいも、映像は伝えてくる。

2014年3月、台湾で学生による立法院占拠事件があった。通称「ひまわり学生運動」と呼ばれるこの事件は、中台サービス貿易協定への反発によるもので、最終的には立法院側が学生側の要求に応じ、23日後に学生達の自主的退去によって落ち着き、日本メディアの報道は収束した。だが、隣国の若者が団結し立ち上がった非暴力直接行動の様子は、少なからず日本にも印象を残した。

実は事件後の昨年8月、8名の龍大生が台湾に赴き、占拠事件当事者の学生数名と接触し意見を交わしたという。その様子を編集したドキュメンタリー映像『龍大生がひまわり学生運動に迫る』が、12月に学内で実施された「龍谷大学映像コンテスト

2014」(経営学部と株式会社毎日放送が連携して開催、10作品がエントリー)でグランプリに輝いた。

制作したのは、夏季海外体験学習プログラム(ボランティア・NPO活動センター事業)で台湾を訪問したメンバー「台湾西倉組」。学部、学年を越えて集まった8名は、8月24日から31日まで8日間の台湾でのプログラムの間、自分達の体験を映像に記録していた。プログラム自体は、「ひまわり学生運動」に関与した学生や、4月の反核運動による第四原発建設中止に関わった市民団体と交流するというものだったが、グループ活動時間には町を歩く市民にまでインタビューをおこない、学生や市民の政治参加意識や日本についての素直な疑問をぶつけてみたのだという。今回の映像コンテストへの出品にあたっては、そのなかで「ひまわり学生運動」に関連する映像に絞り込んで編集した。

当事者の台湾学生達との意見交換は約5時間にもおよんだ。「私達は、台湾の若者が政府動向に意見を持つのに留まらず、直接行動して訴えるまでに至るその理由を聞きたいと思っていました。その疑問をぶつけてからは、とても濃い、白熱した時間で



した」と参加メンバーの西村紗帆さんは語る。

「逆に『日本で投票率が低いことをどう思っているのか』と聞かれて、『私達は関心を持っているけど、関心が無い人がほとんどです』としか切り返せませんでした。すると、『関心が無い人が多くて残念だ、で終わってしまうのは、政治に興味があると言いながら、他人ごとだと思っているのと同じだ』と指摘されました」

台湾学生との交流によって、西村さん達のなかに一つの気持ちが芽生えた。もう他人ごとで終わらせたくない。自分達の体験を伝えなければ。この意見交換のレポートをツールにして、大学で政治をテーマに話すきっかけをつくっていききたい、と。その一つの手段として、映像コンテストへの出品に至った。

といっても、5時間にもおよんだ取材を、5分にまとめるのは大変な作業だった。わかったこと、聞いたことを全て伝えたい気持ちを泣く泣く押さえ、内容を絞り込んだ。締めは「主体的でありたい」という、どうしても込めたかったメッセージでまとめた。台湾の若者と日本の若者の違いは、そこだと感じた。自分ごととして受け止め得るかどうか。それができないとしたら、その国民性が醸

成されてきた背景や原因は何か。

仕上がった映像は、コンテストに出品するだけではなく、様々な授業で発表の機会をもらい、感想を求めて議論のきっかけにしている。知識の有無は関係ない。ただ、映像を見てどう思うか聞かせてほしい。「どうでもいい」なら、それはなぜ？ それすらも、関心の糸口だ。皆で一緒に話をしてみよう。

彼らは今日も作品をひっさげて、日本の無関心と向き合おうとしている。



西村 紗帆 さん

04 | Education, Unlimited

人の倫理観が磨かれる、 遺伝子研究の世界

農学部 植物生命科学科就任予定

岡田 清孝 教授

※2015年4月開設

植物科学界への功績で日本植物学会賞大賞受賞

農学部就任予定の岡田清孝教授が2014年、日本の植物科学への貢献を認められて日本植物学会賞の大賞を受賞した。シロイヌナズナをモデル植物として提案、浸透させた功績である。シロイヌナズナとは？ モデル植物とは？ 岡田教授に話を聞いた。

「シロイヌナズナそのものは、小さな雑草なんです。日本には何百年か前に大陸から入ってきたと言われています。河川敷などの荒れ地に根付きますが、普通の草が生えてくると、環境に負けてしまっで見られなくなります」

ここ30年ほど、世界の遺伝子研究者の7～8割はこの植物、シロイヌナズナを使って実験しているという。

「分子生物学では、モデル植物を使うのが非常に大事なことです。なぜかといいますと、研究者がそれぞれ自分の好きな動物や植物を使ってしまったら、『コレを発見した!』と言っても、ほかの人がそれが正しいかどうかをチェックするのが難しい場合もあるし、そこでわかったことを自分の研究に使おうとしても、使いにくいわけですね。それぞれで使っている植物が違っていると、その先になかなか進めない。そこで、みんな同じものを使いましょうよと言えば、研究成果をすぐほかの人が自分の研究に取り入れたりできるわけで、世界的に学術進歩のスピードが底上げされますよね。だから標準的なものを決めようよと」

それはできるだけ誰でも簡単に育てられる方がいいし、一世代ができるだけ短い方がいい。ふつう、植物だと1年以上かかるものが多いが、シロイヌナズナは1カ月半か2カ月ぐらいで種が取れる。さらに、遺伝子が並ぶゲノムが他の植物と比べて小さいため、花の咲くような植物のなかで一番最初に、全てのDNAの配列が解析された。モデルとして非常に適していた。

「ちょうど遺伝子レベルの研究が植物の研究に導入され始めた時期、1985年前後。その頃、欧米の研究者の間でシロイヌナズナが使われ始めました。日本でも私や恩師など何名かの研究者達が、これは面白いんじゃないかと注目し、1986年に、国際的なシロイヌナズナの研究のネットワークを発足させました。それが最初ですね。日本ではシロイヌナズナを使っている人はほとんどいませんでした。それを増やしていくために、ワークショップやシンポジウムを開催していきました。また、シロイヌナズナの1ミリのつぼみの中から雄しべを取り出し掛け合わすには難しいテクニックが必要です。そのような実験技術を教え合うトレーニングコースを開催したりしました。それで日本でもどんどん、シロイヌナズナを使って、世界共通の土俵で研究をしようという気運になっていきました」

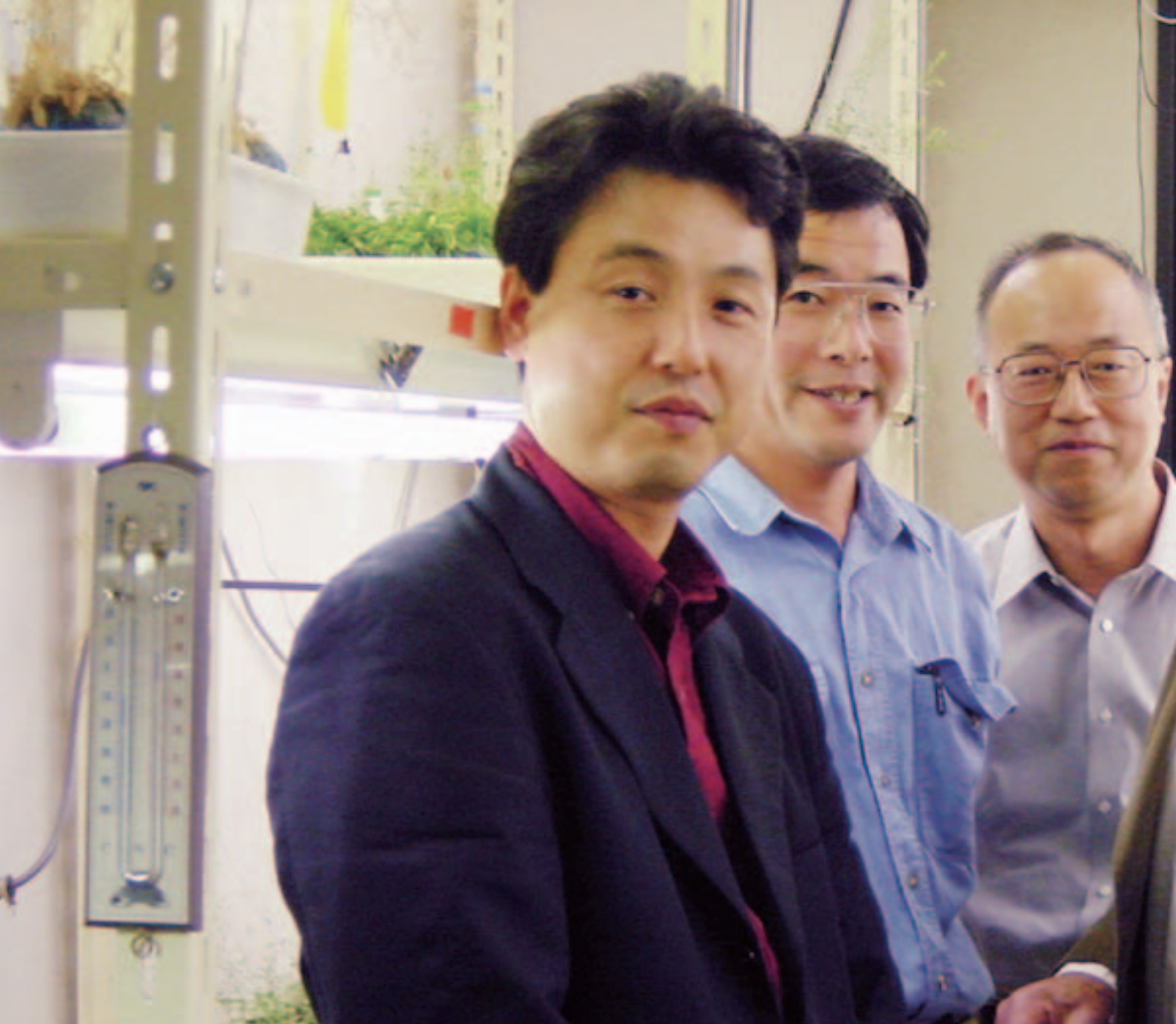
日本の植物科学が世界に遅れをとることなくこれまで発展してきたのは、この動きがあったからこそと言える。「シロイヌナズナ」は高校の生物の教科書にも登場していて、今ではおなじみのモデル植物だ。そして現在はまた時代が次なるステップに入りつつあり、モデルも多様化し始めているのだという。

生物の秘密に挑む

生き物は、遺伝子によってほとんどの性質が決まる。Aという遺伝子が変わってBになると、植物の花の色が変わるといった、一対一の対応がある。その仕組みをみようというのが分子生物学。もともと生理学、生化学、遺伝学、発生学、形態学、進化学といった研究分野があったが、この分子生物学的方策の導入によって、垣根がなくなってきている。

「生き物はどんどん進化しています。優れた作物を作るための





学の研究によって、この遺伝子がこう変わればこうなります、と証明されていくわけです。それがわかるのが楽しいところですね。謎解きですね」

例えば、シロイヌナズナはふつう花びら4枚だが、それに薬をかけたり放射線をあてたりすると、遺伝子のどれかが変化する。研究者は、どの遺伝子がどう変わり、こんな現象になったのか、それをつなぐ仕組みを調べていく。例えば、一つの遺伝子が変わると、遺伝子の指令の内容が変わり、その遺伝子から作られる酵素が、今まで葉でしか働いていなかったのに、花びらで働くようになったり、酵素の量が10倍になったりする。その結果、植物が大きくなったり、早い時期に花が咲いたりする。このように植物の性質と遺伝子変化の間をつなぐ鎖の一つひとつを調べていくと、なるほどそういうことだったのかということになって、面白い。

「植物のできかたについて、人間が一から知っているわけじゃありませんから、変わったものを作って、その理由を調べていくと、全貌がわかってくるというわけです」

農学と分子生物学がめざす未来

作物には、味や色など人間が意図的に品種改良したものもあれば、偶然できたものもある。植物生命科学科の岡田教授の授業では、その原理を、遺伝子レベルの知識で教えていく。

「例えば遺伝子組み換えが社会問題となっていて、その危険性について議論されています。良いか悪いかは一概には言えない。その正しい原理や技術を身につけ、そのなかで、危険や安全を個々で判断できるようになることが大切です」

人間ができることをどんどんやっても良いかという違う。やりすぎると、環境を変えてしまうような大きな被害が出る場合もある。仕組みを熟知し、事前に危険を察知したり、世界の発展に役立てていくことが、はじめて知恵となる。

「倫理観にもつながってきます。正しい視点で見ることができると人材が必要です」と岡田教授は話す。

これからの農は、工業や流通ともしっかり結びつく、そんな時代だ。農業そのものが変わっていくと言われている。



1999年に京都大学理学研究科シロイヌナズナ栽培室にて。海外の研究チームと。右から2番目が岡田教授、3番日は本学農学部就任予定の畑信吾教授。

「議論も活発な難しい分野ですが、逆境に負けずにプラスに変換する挑戦をすべきです。学生達は、農業をしたい、食品開発をしたいなど多様な目標を持ってやってくるでしょう。本学の農学部では、作物の仕組みから、流通、食品化まで、農と食にまつわることを俯瞰して学べます。学生達はそれらを一巡して勉強して、そこから自分の専門を極めていける。それは素晴らしい環境。専門に没頭してしまうと、興味だけで突っ走るということもあり得ます。常に多角的な視点を持つことが大事。そんな学生達が卒業後、それぞれの専門分野で、意見できる人材となり、周囲に良い影響を与える。社会を磨き上げる、非常に重要な人材を輩出することになるでしょう。また、農も国際的な視野が必要な時代です。学生にはぜひ海外に行ってみてほしいですね」

これまではシロイヌナズナを中心に研究していた岡田教授。農学部では、学生の興味のある実際の作物も調査してみる予定。

「聖護院ダイコンなどの京野菜の菌ごたえや味がほかとどう違うのかなど、これまでの応用で調べてみるができますね。新しいことができそうだと楽しみにしています」



岡田 清孝・おかだ きよたか
1948年大阪府生まれ。京都大学大学院理学研究科修士課程修了。理学博士。自然科学研究機構理事・新分野創成センター・センター長、基礎生物学研究所所長、日本分子生物学会理事長などを歴任。2014年から龍谷大学へ。農学部教授就任予定。植物研究の標準としてシロイヌナズナをモデルとしてシロイヌナズナをモデルとすることを提案し、その基礎を築いた。世界の植物学研究界に与えた影響は極めて大きい。

04 | Education, Unlimited

マンガ研究が 国際的な人材と視点を 育む

国際文化学部

杉本パウエンス・ジェシカ講師

(国際学部国際文化学科所属予定)

※2015年4月開設

マンガを通して文化を考える

世界中で高い評価を受ける日本のポップカルチャー。なかでもマンガはエンターテインメントだけにとどまらない物語性や幅広い表現力が人気となり、"MANGA"はもはや世界共通語になっている。

ベルギー出身の杉本パウエンス・ジェシカ講師は、マンガを中心とした世界中のポップカルチャーを通して、各地の文化や社会問題を分析する授業をおこなっている。

「同じ東アジアでも中国や台湾、韓国では、マンガの題材や描き方に対する捉え方がまったく異なります。いずれも日本のマンガの影響を色濃く残しながらも、それぞれの国の社会性を反映しているからです」

日本のマンガは、早くから大手出版社を中心とした商業出版システムが確立され、世代や性別ごとの読者ニーズをくみ取った作品が量産されてきた。しかし、このような仕組みは日本独特のものだ。この仕組みに世界で「MANGA」が評価されてきた理由があると、杉本講師は話す。

「日本では毎週のようにマンガ雑誌が出版され、その連載作品が単行本として刊行されることが一般的ですが、この構造は世界的にみれば特殊です。海外ではマンガ雑誌そのものが存在しない国も珍しくはありませんし、編集者の視点や作業が介在しないまま世に出る作品も多い。マンガ評論家の存在やアシスタント制度が確立されていることなど、日本には『商品』としてクオリティの高いマンガを生む仕組みがあります。この商業システムのおかげで日本の作品は世界中で翻訳出版され『MANGA』が認知されました」

杉本講師の講義では、各国のマンガ作品を比較し、それぞれ

の題材やストーリー展開などから地域性を学ぶ。暴力描写など日本のマンガでは一般的な表現も、地域が変わればタブーとなる。マンガをメディアとして捉え、その制作文化や表現手法を見つめることが世界を知ることにつながっていく。

「例えば、日本の人気作品『クレヨンしんちゃん』はヨーロッパでも多くのファンを持っていますが、アメリカでは子どもが裸で走り回る性的描写がタブーとなり、視聴には年齢制限が設けられたり、台詞の変更がおこなわれています。また、内戦が続く地域では戦火のなかで生きた作家の自伝的作品も多い。マンガは描かれた土地の社会や文化を映す鏡なんです」

ヨーロッパでは、第二次世界大戦で起きたホロコーストを題材にした作品が登場したことで、マンガ表現を多面的な視点で捉えようとする研究が盛んになった。現在も社会的なメッセージを含んだマンガが、ヨーロッパから多く発表されているのはそのためだ。

「『海外』とひとくりに語るのではなく、それぞれの国や地域の歴史文化が反映されていることに注目することが大切です。講義でマンガを読み解く際には必ず、複数のテーマを意識して掘り下げるようにしています。『宗教』『歴史』『生活習慣』『経済』『ジェンダーギャップ』などを切り口にする、そのマンガがどのようなように描かれたのかを知る糸口が見えてくるはずです」

異文化理解とビジネスチャンスの宝庫

杉本講師がマンガに関心を持つようになったのは、軍人だった父の影響だった。

「父は特殊部隊に在籍していましたから世間では強面のイメージでしたが、家ではマンガが大好きな『隠れオタク』。マンガと





いっても、日本では絵本として親しまれている『タンタンの冒険(エルジェ作・ベルギー)』シリーズなどで、ヨーロッパの伝統的なマンガ『バンド・デシネ』ですね」

杉本講師は、まだ小学校に上がらないうちから、父の書斎にある数百冊ものマンガを読んで文字を学び、物語の面白さを知った。作家ごとに様々な画風があり、出来事を表現するための描写にも多くの工夫があることも驚きだった。社会で起きる多様な事象に関心を向けるきっかけは、この幼年期の体験で育まれた。

「おかげさまで勉強、とくに言語について学ぶ上で苦勞を感じたことはありませんでした。自分で言うのもヘンですが優等生で成績はいつだってトップ。勉強の基礎はマンガだったんです」と笑う杉本講師。しかし、当時のベルギーでは、マンガ好きを公言できるほどポップカルチャーは文化として認知されていなかった。

「『マンガは教育に悪い』という扱いは日本と同じかもしれませんがね。小学生のとき、成績優秀者として褒められて先生から勉強のコツを質問され、『マンガです』と答えると先生は激怒、クラスの皆は爆笑。以来、私も父と同じく『隠れオタク』になりました」

杉本講師は大学進学の際に日本語学科を選ぶ。各国のマンガを通じてすでに5カ国語を習得していたが、アルファベットを使わない未知なる言語への探究心は強かった。

「当時はまだ日本のマンガはあまり知らず、日本文化にも関心はありませんでした。日本のマンガに出会ったのは大学に入学してからです。それも最初は『日本語の勉強のためになるなら』と手を伸ばした。とにかく真面目な学生だったんですよ」

杉本講師はすぐに日本のマンガが持つ表現力に夢中になった。とくに少女マンガの繊細な心理描写には、これまで読んだどの国の作品にもない深みを感じた。

「フランス語圏を中心に発展したバンド・デシネは男性文化。大胆でわかりやすいストーリー展開が魅力ですが、感情表現は少なく女性向けのマンガは存在しません。一方で日本の少女マンガでは心理描写を中心に据えてストーリーが展開します。この文化の違いが興味深かったんです」

マンガ表現の違いから相互の文化を読み解くこの視点は、講義内容に存分に活かされている。



「学生には、海外のマンガに翻訳版があっても、できるだけ原文で読むように勧めています。マンガには擬態語や擬音語などもあり、必ず他言語に訳しきれない概念があるはず。そこに、そのマンガが描かれた文化的背景が隠されています」

今後はこれまで以上に、「輸出産業」としてマンガ市場の整備が求められるようになると、杉本講師は話す。

「アニメや映画などほかのポップカルチャーとの関係も深まり、マンガの世界にはまだまだビジネスチャンスがあります。そして、その市場を担う人材は世界中で不足している。学生達には、マンガを世界へと目を向けるきっかけにしてほしいですね」

今春開設する国際学部国際文化学科では、自己の文化理解をもとに異文化の多様性とその背景を学び受け入れ、異文化間の摩擦を調整するファシリテーターとして活躍できる人材育成をめざしている。

杉本講師のマンガによる異文化理解の探究は、まさに国際文化学科の学びの特徴を表しており、本学科での学びが国際人としての一步を踏み出すきっかけとなることが期待される。



杉本 バウエンス・ジェシカ

1972年ベルギー・フランダース地方生まれ。
ルーヴァン・カトリック大学

(ベルギー) 日本学修士、社会文化人類学修士。1997年に来日、大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了(2007年)。京都精華大学マンガ学部准教授、国際マンガ研究センター研究員を経て現職。

専門分野は社会学、文化人類学、カルチュラル・スタディーズ。とくにヨーロッパにおけるマンガ表現や、日本のマンガが与える社会的影響の考察を、継続的にこなしている。

05 | World, Unlimited

研究発展に貢献するデータを
世界へシェアしていく

龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター：
フランス国立図書館所蔵の
敦煌文書「ペリオコレクション」
科学分析アーカイブ公開

実物に触れて確かめたい研究者と、文化財保護とのギャップ

「ペリオコレクション」とは、20世紀初頭に敦煌莫高窟において発見された、「敦煌文書」と呼ばれる数万点にのぼる大量の古文書のうち、東洋学者のポール・ペリオがフランスへ将来したものを指す。フランス国立図書館が所蔵しており、貴重なコレクションであるため、これまで科学的な分析には未着手であった。しかし、本学古典籍デジタルアーカイブ研究センターは、2年ほど前からフランスへ研究員を派遣し、この「ペリオコレクション」について、非破壊での分析手法を開発・適用して、大規模な文書分析に取り組んでいた。そして昨年末、それらの分析データを全て、インターネット上で無償で公開した。

「例えば、日本のある研究グループがデータを抱え込んで、そこで解析をして発表をする…、終わればそのデータはどこかに埋もれる、その繰り返しが多かった。そんな研究の世界を変えていこうという思いがあります」と語るのは、同センター長の岡田至弘理工学部教授。

「私はもともと古文書の研究者ではありません。あくまで情報工学の立場ですし、材料科学の方は材料科学の立場で携わっていらしたんですが、まずは共通の土俵を作ろうと。そのデータについて、私達の分野ではわからなくても、別の分野の方の視点が入れば、何か発見があるのかもしれない。それを期待しています。解析されたデータは、自分達にはよくわからない物も、全て洗いざらい出していくことにしました」(岡田センター長)

この研究のベースになっているのは、15年以上続いている国際敦煌プロジェクト(IDP)。約2000年前の敦煌文書は、発見されて約100年が経つ。その間、各分野の研究者が実物を閲覧するうち、破損も進んできた。文化財保護の立場からすると、これ以上出し入れして破損や劣化させるようなことはしたくない。ということでまずは、情報工学の立場から、人間の目で見られる精度の画像写真によって記録に残していくことに取り組んだ。

ところが画像の公開が一定のピークまできても、まだ「実物に触れたい」という要望が後を絶たない。文書の媒体は紙。写真のさらに奥の、風合いなどの情報が求められるのだ。手で触ってみて、柔らかいか、硬いか、どれぐらいの厚みがあるのか、素材についても一定の判断をしたい。それは画像だけではわからない。触れて確認することを補う情報とは何か。紙の繊維を一本抜いての素材研究は既に確立はしていた。けれどもそれでは破壊になるし、いろんな繊維が混じっている紙から、一本抜いて調べたからと言って確実ではない。非破壊で、紙の組織、素材、それらを解析できるだけの準備を整えて、そのデータを公開したのが今回である。

情報工学技術を駆使したデータ品質

各国に分散している敦煌文書の中でも、特に年代が記してあるものが揃っている「ペリオコレクション」に優先して取り組んだのは、基準をつくるため。敦煌文書は、最古とわかっている李柏文書の4世紀から、14世紀頃までと年代が幅広い。その中で年号記載があるものを中心に解析すれば、紙質データと年代が結びつき今後の研究の基準ができる。それを「ペリオコレクション」でつくりたいという意図があった。

データの準備は一筋縄では行かなかった。もともと紙は白いもの。光学顕微鏡で見たい場合は染色をすればコントラストが出るが、



<http://idp.bnf.fr/>

フランス国立図書館蔵 ペリオコレクション (P2205)

有善光如猶如夏日本元邊古名大涅槃
復次善男子如日月光諸明中軍一切諸明
所不能及大涅槃光亦復如是於諸慧經三
昧光明軍為殊勝諸經三昧所有光明所不能
及何以故大涅槃光能入衆生諸毛孔故衆
生雖无菩提之心而能為作菩提因緣是故
復名大般涅槃

大般涅槃經卷第八



大業四年四月十五日敦煌郡大黃
府檢帥王海奉為三姊教造涅槃
法華方廣經各一部以茲勝
業奉禮尊靈願超越三途登
臨七淨世生生還為眷屬

大般涅槃經卷第八 隋時代 大業4年(608年)

破壊につながるので、今回は完全に無染色で実施。カメラで乱反射を防ぐために使う偏光フィルター、これを使って顕微鏡の光源を制御しながら、もともとないコントラストを、上げているのだという。複雑な装置が必要で、どこでもできるのかと言われれば、それは難しい。

また、ふつう光学顕微鏡では断層面しか見えないが、公開したものは立体で見えている。

「焦点深度をかなり深く取るという画像処理をしています。それは私達の研究分野ですから」(岡田センター長)

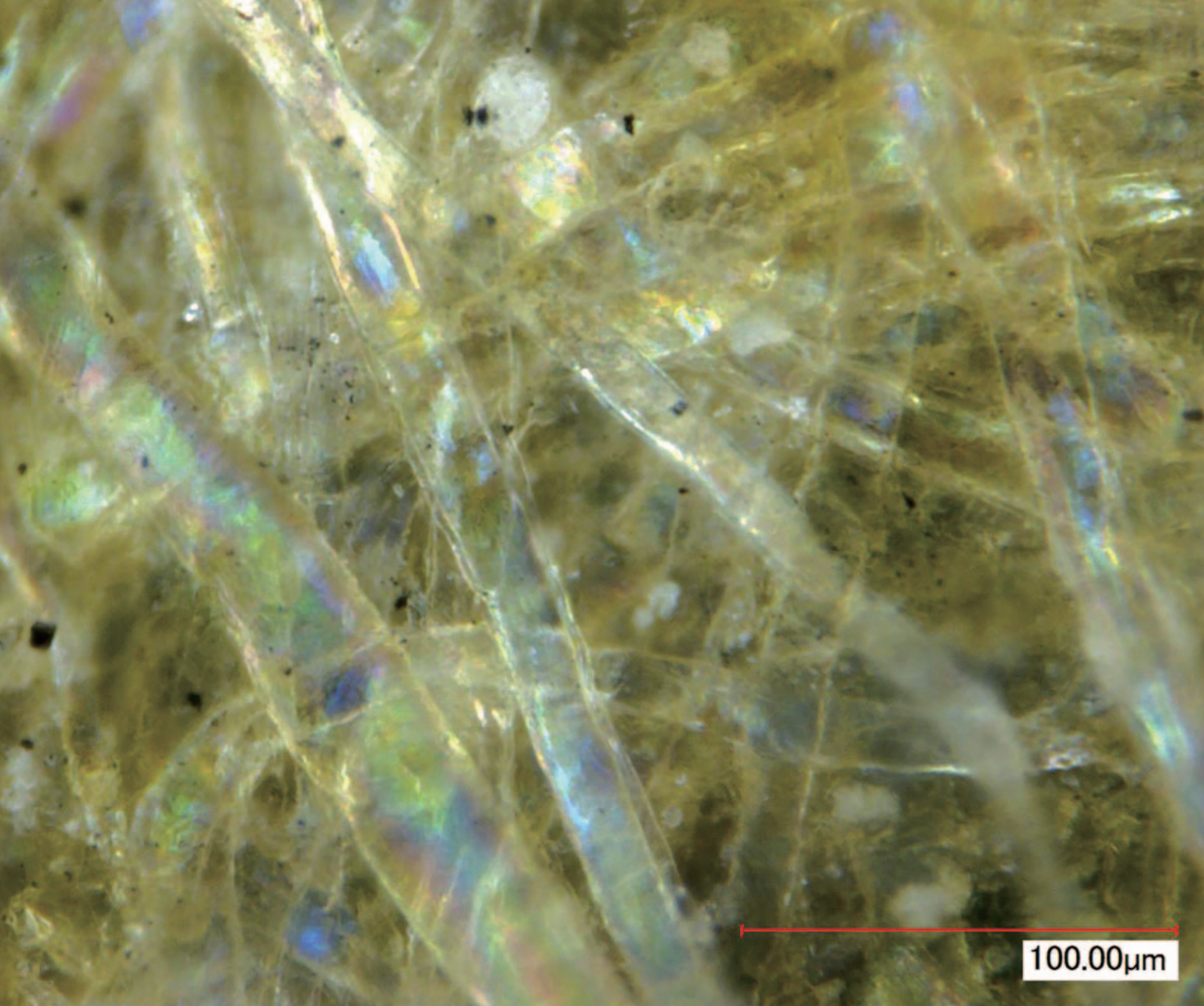
実は公開した画像データ1枚につき、顕微鏡の写真を約50枚ほど使っているという。焦点深度を変えた画像を多数重ね、あたかも焦点深度の深いレンズで撮ったように奥行きのある画像に仕上げた。データは実は立体にもでき、横から見たりもできるが、一般公開するにはブラウザやソフトなどの問題もあり検討中。また古文書にはたわみもあるが、たわみの補整もしている。細かい作業の結晶である。日本から1トン近い機材を航空便で送って、研究者を派遣し、1年半かけておこなった。世界的な研究発展に貢献する基準をつくるという一心で動いた。

「このデータ公開、簡単に思われるんですが、実は大きな話だと私は思っているんですよ(笑)多大な時間をかけて、なおかつ、10年後、100年後、もう一回やろうと思ってもできないぐらいの量の計測に取り組みました。どれほどこの学術データに寿命があるのかわかりませんが、少なくともここ何十年かは研究していただけるだけの量はあると思っています」(岡田センター長)

大量のデータ解析の結果みえてきたのは、年代順にならべてみた紙の品質の変化と、敦煌中心の文化的背景の推移との関連性。政治、文化体制が安定していないとき、その産業の品質も揺らぎ、紙質も揺らいだ。ということは、今後、年号記載のない敦煌文書も、漉き方や地合いなどの紙質をデータ解析することで、10年前後の単位で年代を推定できることにつながる。

自分達のためだけでなく、世界へシェア 文化財もオープンデータの時代へ

ここ数年、世界的に、オープンデータとして文化財を全て公開する流れがきている。フランスの場合、全ての文化財について公



顕微鏡写真 格繊維の構造

開するという原則がある。先日アメリカのスミソニアン博物館が3次元データ公開に踏み切り、ニュースとなった。その中には、日本から明治時代に流出した曼荼羅なども含まれるようだ。貴重なものの公開が既に始まっている。とはいえ、図像の公開にとどまっていることが多く、研究者が触れずに分析可能なデータというわけではないのが現状。

大英図書館のスタインコレクションや大谷探検隊の李柏文書など、重要な文書はまだある。研究はなされているが、調べるだけでなく、解析元となった生のデータを公開ということに近づけていかないと、結局、ある時代の、あるコミュニティにしか通用しないという研究成果となり、世界的な学術発展へはつながりにくい。だからセンターはデータ公開に挑み続ける。

「従来と全く違う分野から、文化財研究に切り込んでいます。だからこそ一定の品質で、しかも継続的にデータを出していくべきと責任を感じます。そのためにもフランス国立図書館と合同で出すということに意味があったのです。龍谷大学の特殊な研究で特殊なデータだけ公開されたということではなく、世界的に使えるという前提で動いています」(岡田センター長)

同センターは昨年は高山寺所蔵の文書の解析も担当し、新発見があった。国内外から文化財解析の依頼は次々と舞い込む。工学技術が従来の研究手法を変え、世界の文化財を保護し、学術界の情報シェアをも担い、いつか世界のどこかの誰かが、また一つ新しい発見をする。その流れをまずは、ここからつくっていききたい。



龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター：
センター長 岡田 至弘 (理工学部情報メディア学科 教授)

06 | Event Ryukoku Museum

隠れた修験道美術、現る



増誉大僧正900年遠忌記念 特別展

「聖護院門跡の名宝

—修験道と華麗なる障壁画—

2015年3月21日(土・祝)~5月10日(日)

主催 龍谷ミュージアム、京都府、京都文化博物館、読売新聞社

聖護院と聞くとカブラやハツ橋が連想されるが、その名の由来となった寺院「聖護院」がどんなお寺かを、ご存じの方はどのくらいいるだろうか。この春の龍谷ミュージアムの特別展では、この知られざる聖護院にスポットを当てる。ますます京都を奥深く感じること間違いなしだ。

聖護院はもともと修験道、山伏の寺である。開山の増誉大僧正は平安時代後期の人で、大峯山などで山岳修行し、修験僧として名を馳せた。白河上皇の熊野参詣の折には先達をつとめて初の「熊野三山検校」に任じられ、それ以降全国の修験者を統括した。そして上皇から聖護院を賜り、最盛期には全国に2万あまりの末寺を抱えたという。聖護院はのちに皇室から親王が入寺し、門跡寺院ともなった。

山伏の寺・聖護院。この寺院には、修験道が生んだ宗教美術作品や皇室ゆかりの名宝が秘められている。この度の展示は増誉大僧正の900年遠忌記念特別展として、本学OBであり客員教授である、聖護院現ご門主・宮城泰年師の協力によって実現した。企画担当のミュージアム副館長の石川知彦さんと、学芸員の村松加奈子さんに、展示のみどころをお聞きた。

「今回は、3階は修験道関係資料、2階は障壁画をテーマに展示します。まず修験道といえば役行者です。大化の改新後の時代の人物で、山岳修行を積み、鉈脈を知り、薬草の知識に長け、山の民をまとめた、仙人のような人だったと言われています。のちに政権から疎まれて達伊豆大島に流されますが、伝説も手伝って、自然崇拜・民間信仰要素の強い修験道の祖とされました」(石川さん)

聖護院の宸殿にまつられているのがその役行者坐像(写真中央)であり、今回の展示でお目にかかることができる。長頭巾をかぶり一本歯の高下駄を履き、夫婦の鬼を両脇に従える。口を閉じているのが妻・後鬼で水瓶を持つ。向かい合う夫・前鬼は鉈を持っている。役行者は彼らを使役して水を汲ませ、薪をとら



せたとされる。

本尊の不動明王像もちろん登場する。ウインクしているように見えるのは、10世紀以降に流行したかたち(写真左)。不動明王は密教で本尊にされることが多く、各地の聖護院末寺にまつられる個性的な不動明王達も集合。特別映像では最新技術によって判明した、もう一体の不動明王の当初の姿も再現される。孔雀明王像も見逃せない。毒蛇を食べる孔雀は古来より仏の使者として伝えられてきた。孔雀明王はその蛇を首に巻き、4本の手を持つ。修験道では多くまつられ、聖護院蔵の掛軸で見られる。

さらに、聖護院内で最も華麗と言われているのが、孔雀明王から着想を得たと思われる「孔雀の間」。孔雀の襖絵で囲われた部屋だ。障壁画を中心に展開する2階には、この孔雀の間をまるごと持ってきて、16面の孔雀絵空間も再現。その他、障壁画の作者としては江戸時代の狩野派の巨頭の名も登場し、当時一流の絵師による豪華な競演が繰り広げられる。

「また調査によって、大玄関や宸殿のそれぞれの襖絵の群鶴図襖(写真背景)が、並べてみると横につながっていくことがわかりました。例えば御所にあったものが移されたとか、もともと一

つの広大な空間におさまっていた可能性も考えられます。今回の展示では、現在は別々の部屋に収まっている襖をつなげて展示しますので、ぜひご覧ください」(村松さん)

修験道の歴史を知ること、京都の魅力をまた新たに堪能できる。出会いがたっぷりの特別展となりそう。さらに興味をひかれた方は、京都文化博物館で同時開催される「聖護院門跡の名宝―門跡と山伏の歴史―」にも足を運ばれては。



石川 知彦 (龍谷ミュージアム副館長・学芸員)

村松 加奈子 (龍谷ミュージアム学芸員)

06 | Ryukoku Event

農学部 食の循環トークセッション

農学部就任予定教員などが、「食」と「農」にまつわる様々な課題に取り組むトップランナーをゲストに迎え、「食の循環」をキーワードに、諸課題の本質的な解決に向けたトークセッションを開催。今年度後期におこなわれたトークセッションの概要を紹介する。



第6回

「京都産酒米から学ぶ『米』と『食の循環』 ～ 日本の伝統産業と農業の未来 ～」

ゲスト：若井 芳則 氏（黄桜株式会社専務取締役）

日 時：2014年10月3日（金） 会場：伏見夢百衆

国際学部 多文化共生トークセッション

国際文化学部教員が、「多文化共生」を実践しているゲストを迎え、グローバル化する社会の未来を切り拓くべく、トークセッションを開催した。今年度後期におこなわれたトークセッションの概要を紹介する。



第2回

「私たちだからこそできる 世界の課題解決へのグローバルリーダーシップ」

ゲスト：渡部真由美 氏（元国連職員）

日 時：2014年9月28日（日） 会場：深草キャンパス4号館地下カフェスペース



第3回

「ブランドとしての京都」と「多文化共生コミュニティ」

ゲスト：J・A・T・D にしゃんた氏（社会学者、羽衣国際大学准教授）

日 時：2014年10月31日（金） 会場：龍谷ミュージアム

本トークセッションは、USTREAM でも同時配信しており、これまで実施したトークセッションについてもご覧いただくことができます。

www.ustream.tv/user/ryukoku-talksession



国際学部開設記念 グローバル教育フォーラム

国際学部がめざす「グローバル人材育成」

世界を舞台に活躍している第一人者の提言から、グローバル時代に求められる人材の育成と教育の形について考えた。

日 時：2014年9月21日（日） 会場：龍谷大学響都ホール校友会館

基調講演：「競争力としての人材のダイバーシティ ～ グローバル・リーダーの要件～」

橘・フクシマ・咲江氏（G&S Global Advisors Inc. 代表取締役社長）

パネルディスカッション：「グローバル化とグローバル人材の捉え方」



日経ユニバーシティコンソーシアム

日本を変える農業の未来

日本の食と農業の明るい未来を展望するために、命を支える食と農について考えるシンポジウム。当日は400名を超える方々にご参加いただいた。

日 時：2014年11月11日（火） 会場：日経ホール

基調講演：「未来の日本が変わる、日本を変える農業の未来」

藤田 正美 氏（ニューズウィーク日本版 元編集長 / フリージャーナリスト）

パネルディスカッション：「次世代の農業のカタチとグローバル時代の食の循環」



理工学部シンポジウム

社会に貢献する理工系グローバル人材の新展開

日 時：2014年10月29日（水） 会場：龍谷大学瀬田キャンパス8号館103教室

基調講演：「ボローニャプロセスの展開およびヨーロッパにおける高等教育の質保証と倫理教育の将来構想」

Claudio Fiegna 氏（イタリア・ボローニャ大学学長代理）

「大学の国際化とグローバル人材育成」

佐野 太氏（文部科学省 大臣官房審議官・高等教育局担当）

パネル討論会：「グローバル社会のなかで科学技術の発展に資する教育の質保証と倫理教育の必要性」

06 | Ryukoku Event

第12回

青春俳句大賞

「龍谷大学青春俳句大賞」は、世界最短の詩形文学である「俳句」を通じて、現代に生きる若者が感じたこと、思ったことを自由に表現し、社会に発表する場を提供することを目的に2003年度から開催しており、今年で12回目を迎えました。

今回は過去最多の123,987句数が集まり、力作が多く寄せられました。英語部門には、昨年の3倍以上となる2,829句の応募があり、英語俳句への関心の高まりがみられる結果となりました。

厳正なる選考をおこなった結果、見事に最優秀賞入賞を果たした作品をここに発表します。

中学生部門 最優秀賞

コスモスや雲より遅き飛行船

神奈川県 山下 真さん 私立開成中学校3年

評・寺井谷子

一面のコスモス畑とその上の真つ青な秋晴れの空。そのなかをゆつくりと進む飛行船。時折、ゆたかな流線型の何処かがキラリと耀いて…。「コスモスや」の切れの見事な働き。

高校生部門 最優秀賞

糸瓜忌や正しき位置に祖父の机

愛媛県 村上 明由さん 愛媛県立伯方高等学校2年

評・大峯あきら

正岡子規の命日は九月十七日だから「糸瓜忌」とも言う。その糸瓜忌の頃、生前の祖父が書齋にしていた部屋のありさまを詠んだ作。何もかもそのままになっているが、とりわけ作者の注意を引いたのは、愛用の机である。「正しき位置」に作者の思いがこもる。

短大・大学生部門 最優秀賞

河童忌や蓋の開かぬインク瓶

東京都 岩田 麗加さん 明治大学4年

評・大石悦子

「河童忌」は芥川龍之介の忌日で七月二十四日。小説『河童』を発表したり、好んで河童の絵を描いたりしたところから名付けられました。作家という也太い万年筆が思い浮かびますが、そのインク瓶の蓋が開かないという場面設定に無理がありません。

想いでの修学旅行部門 最優秀賞

さとうきび畑のざわを聴いた夏

京都府 北 亜由海さん 京都市立桃山中学校3年

評・大石悦子

一読してすぐだけれど、あの「さとうきび畑」の歌を思い出すでしょう。沖縄戦で父を喪った若者の鎮魂の歌ですが、修学旅行先に沖縄が選ばれることの意義を考えさせられます。さとうきびが風に鳴る音に、戦死者の怒りや無念の声を聴いたのです。

文学部部門 最優秀賞

鳴る神に帰りの一歩遠ざかり

愛媛県 谷口 太一さん 愛媛県立西条高等学校3年

評・越前谷宏

「かみなり」とは、「神鳴り」であり、「鳴る神」とは、万葉集にも出てくる古語である。まだ遠くに雷鳴しか聞こえないのだが、学校を出るのが躊躇される。その戸惑いを客体化し、「帰りの一歩遠ざかり」と表現する。大人びた風格を醸し出している。

英語部門 最優秀賞

My old house key Covered in rust Still works like a charm

茨城県 染谷 有紀さん
私立茗溪学園高等学校1年

評・ウルフ・スティーブン

事情で長く離れた家に戻る。死別、東北のような災害、その理由を乗り越えながら不安にかられ廻す鍵。まるで家は一度も自分を疎外したことがないかのように、すりと迎え入れる。一条の光が人生の先を照らす暖かさを感じる。

07 | News & Topics

最新情報



卓球部女子、 3年ぶりに関西学生秋季リーグ戦優勝

2014年9月、「関西学生秋季リーグ戦」で卓球部女子が優勝。近大相手に3セット以上を取ることができれば優勝となる龍大。しかし近大の攻めに対応しきれず3連敗したが、そこから主将市原芹菜さん(文学部4年)と桑村郁未さん(文学部2年)の粘りで逆転し、龍大の3年ぶり総合優勝を果たした。



龍魂編集室提供

柔道グランドスラム東京で 西川選手が3位入賞

2014年12月、世界が注目する「柔道グランドスラム東京」に、西川真帆さん(文学部4年)が女子63kg級に出場し3位入賞。国際大会という大舞台でみごと銅メダルを獲得した。今大会は彼女にとっても次へつながる大きなきっかけとなり、これからは世界で通用する選手となっていくだろう。



龍魂編集室提供

バドミントン部女子、全日本学生選手権大会 で創部初の団体準優勝

バドミントン部女子が2014年10月、「第65回全日本学生バドミントン選手権大会」で、創部初の団体準優勝に輝いた。決勝で惜しくも敗れたが、力の差はさほどではなかった。今回はベンチ外メンバーも含め、チーム一丸となって勝ち取った準優勝。優勝できなかった悔しさを胸に秘め、さらなる飛躍に期待したい。



女子バレーボール部、 全日本大学女子選手権大会でベスト8

2014年12月、「第61回秩父宮妃賜杯全日本バレーボール大学女子選手権大会」でベスト8に入った。関西1位の龍大は前の試合が終わったすぐの準々決勝という体力的にも厳しい試合順もあり、九州学連1部1位の福岡大学相手にシーソーゲームに持ち込むが、惜しくも敗れ残念ながらベスト4には進めなかった。



ラグビー部、3年ぶりに関西大学A・Bリーグ 入れ替え戦で熱戦

ラグビー部は2014年12月、関西大学リーグA・B入れ替え戦に臨んだが、Aリーグの壁は厚く昇格できなかった。「点差ほどの差はなかった。独特の雰囲気でも自分達の力を出し切れなかった」と大内監督。「Aリーグ昇格」という目標は後輩達に引き継がれる。来年こそ、最高の笑顔でその目標を達成してほしい。



吹奏楽部、関西アンサンブルコンテストで金賞。関西代表に。

2015年2月、「第41回関西アンサンブルコンテスト」に、京都府代表として出場した、吹奏楽部のサクソフォン四重奏が金賞を獲得。「全日本アンサンブルコンテスト」の関西代表になった。曲の素晴らしさや力強さを表現できるようさらに磨きをかけ、3月に東京でおこなわれる全国大会で、ベルノー作曲のサクソフォン四重奏曲第4楽章を演奏する。



「きょうと地域力アップ貢献事業者」として 辻田ゼミナールが表彰される

2015年1月、経済学部辻田素子ゼミによる「下京区豊園学区のまちづくり活動」が第1回「きょうと地域力アップ貢献事業者」として京都市より表彰された。豊園学区は、祇園祭に関係する地域で、伝統産業に従事する職人も多いところ。学生は、祇園祭や既存の行事に裏方として参加したり、地域の魅力を再発見するためのイベントなどを企画した。



龍谷大学吹奏楽フェスタin愛知

2014年12月7日、吹奏楽部は、「吹奏楽フェスタin愛知」を開催した。愛知県の9高校に、宮城県の門脇中学校を加えてのチャリティージョイントコンサートで、中学生の元気な演奏の姿には吹奏楽部のメンバーも刺激を受け、ラストの演奏では700名以上の大人数での合同演奏。最後にはお客様も含めた会場全員での合唱と演奏で締めくくり、会場は大いに盛り上がった。



経営学部 三谷ゼミ「証券ゼミナール大会」 で優秀賞受賞！

「証券ゼミナール大会」とは、金融・証券を学んでいる全国の大学のゼミの学生が、所定のテーマについて事前に論文を交換し、大会の場で討論するもの。今回は2014年12月に、31大学49団体674名の学生が参加。テーマごとに17のブロックに分かれて討論をおこない、経営学部・三谷ゼミが優秀賞を獲得した。本学の優秀賞は通算4回目となる。



「第3回石垣・石段・石畳フォトコンテスト」で 経営学部生が最優秀賞を受賞

イヤーブック作成委員会でも活動する経営学部2年生の塔筋亮さんが、「石垣・石段・石畳フォトコンテスト」で最優秀賞を受賞。このコンテストは、世界に誇れる日本の石組み文化を身近に感じてもらうことを目的に2012年より開催。3回目の今回は943点の応募があり、塔筋さんが夜中3時に撮影したという「雨に濡れた大谷本廟」が最優秀賞に選ばれた。



成人のつどいを開催

「第40回龍谷大学成人のつどい」は、厳かな音楽法要が勤修され、参加した新成人全員が『成人として、真実に生き抜くものの自覚に立ち、建学の精神に基づいて確かな人生を築き上げ、社会に貢献することを誓います』と唱和し、喜びと感謝の気持ちを新たに。記念講演では、本学OBでMBS毎日放送アナウンサーの福島暢啓さんから「大人になれない私から、大人になった皆さんへ」と題したお話をいただいた。



藤岡ゼミ・松永ゼミが 京都市自治記念式典で表彰される

「京都市自治記念式典」は、京都市の発展に貢献した個人・団体を称え表彰するもので、2014年10月、経営学部・藤岡章子ゼミと、スポーツサイエンスコース・松永敬子ゼミが表彰された。藤岡ゼミは京都市上下水道局と協働で実施した「京の水カフェ」事業が、松永ゼミは「京都市事務事業評価サポーターとしての取り組み」が評価された。



「第6回印南かえるのフェスティバル」で 野外活動部が地元子ども達と交流

印南町内の産業振興や地域活性化のために、町民や各種団体の協力で開催される「印南かえるのフェスティバル」は、毎年1万人の来場者を集めるビッグイベント。印南町には小・中学校しかないため、大学生の世代と交流する機会が少なく、地元子ども達にとっては貴重な機会。当日は野外活動部のほか、ロンくん、ロンちゃんも駆けつけた。



RoboCup2014世界大会で 理工学部電子情報学科のチームが2位入賞

2014年7月、ブラジル ジョアンペソアで「RoboCup2014」が開催され、Logistics League Sponsored by FESTOに理工学部電子情報学科のチーム「BabyTigers-R」が参加し、テクニカルチャレンジで2位になった。RoboCupはロボット工学と人工知能の融合、発展のために自律移動ロボットによるサッカーなどを題材とした競技会である。



学生プロジェクトチームが「ゆずつくねカレー」を開発

学生プロジェクトチームが、龍谷大学オリジナルレトルトカレーを開発した。約3か月間ミーティングなどで議論を重ねて、「つくね入りゆず胡椒風味カレー」が完成した。同商品は本学卒業生で学食研究家の唐沢明氏の監修のもと製作されている。3月27日よりファミリーマートが展開するショッピングサイト「famima.com」<<http://famima.com>>にて、3個パック1,200円(税込)で購入することができる。



文学部博物館実習 十二月展「いろはの医 —祈りと医療の歴史—」展示会開催

2014年12月、博物館学芸員資格取得のための授業の一環として、文学部学生による十二月展を開催。学生が開催テーマを決定し、展示品となる史資料の調査や収集、企画運営の一切を担うもので、今年で35回目を迎えた。今回の展示では、考古学、神仏、中国、民間医療、近代の五つの章に分けて、それぞれの切り口から「医療」について紹介する展示をおこなった。



短期大学部が 「第18回糸賀一雄記念賞」を受賞

「糸賀一雄記念賞」は、障がい者の基本的な人権の尊重を基本に、生涯を通じて障がい者福祉の向上に取り組まれた故糸賀一雄氏の心を受け継ぎ、この分野で顕著な活躍をされている個人及び団体に対して授与するもので、短期大学部の取り組み「知的障がい者オープンカレッジふれあい大学課程」が2015年2月に表彰された。



第10回大学間里山交流会を開催

「大学間里山交流会」は、里山を活用する大学間の活動報告及び情報交換会であり、これまで14の大学の教員や学生が参加し、それぞれの大学での取り組みを紹介をしている。今回で10回目となる本交流会は2014年11月、龍谷大学深草学舎にて、「大学の里山をどう活かすのか～大学の里山利用の現状と課題～」をテーマに、講演会「大学間里山交流会の歩み」と、ワークショップ「これからの里山利用」がおこなわれた。



藤田和弘教授が日本ネットワークセキュリティ協会よりJNSA賞を受賞

理工学部情報メディア学科藤田和弘教授(特定非営利活動法人滋賀県情報基盤協議会理事長)は、インターネット安全教室を中心とする情報セキュリティ普及啓発活動を活発に実施することにより、広く一般社会のセキュリティ知識の向上に貢献したことが評価され、特定非営利活動法人日本ネットワークセキュリティ協会より「JNSA賞」を受賞した。



「おおつ未来まちづくり学生会議」(大津市×龍谷大学)の取り組みが活動奨励賞を受賞

「環びわ湖大学地域交流フェスタ2014」は、「地域の課題に大学と地域が協働で取り組む活動」や「大学が自主的に取り組む活動」、「学生が滋賀県内でフィールドワーク・研修を行う学生支援事業」の報告会として、2014年12月に開催。そのなかで大津市と龍谷大学とが連携した「おおつ未来まちづくり学生会議」による取り組みが活動奨励賞を受賞した。



木村昌弘教授が国際会議「DSAA'2014」において「Best Research Paper Award」を受賞

理工学部木村昌弘教授執筆の論文「Efficient Analysis of Node Influence Based on SIR Model over Huge Complex Networks」が、IEEE(電気・電子工学、通信工学、情報工学分野の国際学会)とACM(計算機科学分野の国際学会)共催の国際会議「DSAA'2014」において「Best Research Paper Award」を受賞した。



第5回矯正・保護ネットワーク講演会開催

矯正・保護総合センターでは、矯正・保護分野の問題に関心を寄せる多様な人々に対し、それぞれの思索と相互理解を深めるため、議論・研修の場を提供する「矯正・保護ネットワーク講演会」を開催している。2015年2月に第5回目として、響都ホール校友会館にて、松本サリン事件被害者である河野義行氏を講師に招き「被害者から見た社会の理不尽さ」のテーマでご講演いただき、220名が耳を傾けた。



小川圭二講師の研究グループがJPCA Show2014でアカデミックプラザ賞を受賞

2014年6月、本学理工学部小川圭二講師と同志社大学青山栄一教授、廣垣俊樹教授らの研究グループが、「JPCA Show2014(第44回国際電子回路産業展)」のアカデミックプラザで「高速度カメラを用いたCuダイレクトレーザ加工時の発光量モニタリングと照射時間の設定」の題目で講演発表をおこない、アカデミックプラザ賞を受賞した。



第11回 龍谷大学×同志社大学 ジョイントセミナー in MOBIO 開催

龍谷大学と同志社大学は、ともにクリエイションコア東大阪にある産学連携の拠点であるMOBIO(ものづくりビジネスセンター大阪)の産学連携オフィスに共同入居している関係から、毎年ジョイントセミナーを開催している。2014年12月、第11回目を迎える今回は「ものづくり」をテーマに、多くの参加者が、両校のシーズ発表に熱心に耳を傾けた。



龍谷大学大学院経営学研究科主催 「中国ビジネスセミナー」開催

2014年12月、大阪梅田キャンパスにて『現代の中国で成功するためには』をテーマに、「中国ビジネスセミナー」を開催。「最近の日中関係事情」、「中国での会社経営について～中国でいかに儲けるか～」の講演に、中国ビジネスに関心のある社会人約30名が参加し、熱気あふれるセミナーとなった。



嘉田由紀子氏の公開講演会開催

2014年12月、龍谷大学大学院NPO・地方行政研究コースが、「いま、私たちが必要とする政治とは～嘉田由紀子前滋賀県知事からのメッセージ～」をテーマに公開講演会を開催した。今、私達が必要とする政治とは何か。いかなる価値にもとづく政治が重要なのか。また、そうした政治は、誰が、どういう方法で創り出せるものなのか…を嘉田氏と一緒に考えた。



第5回 REC BIZ-NET研究会を開催 「食」と「農」のつながりを考える

今年度RECが全8回開催予定のREC BIZ-NET 研究会の第5回が、2014年10月、「『食』と『農』のつながりを考える」をテーマに開催。農学部長に就任予定の末原達郎教授から新設する農学部の紹介の後、大学・企業・金融機関それぞれの視点から、農業に関するテーマについて講演及び話題提供がおこなわれ、大変活況な研究会となった。



福祉フォーラム「第12回 共生塾」開催

2014年9月、瀬田キャンパスRECホールにて、「つながる、つなげる、おもしろい活動」をテーマに、福祉フォーラム主催の「第12回共生塾」が開催された。レストラン経営を通して人とのつながりをデザインする取り組みや、山間部など買い物が困難な地域へ食材や日用品を積んだ販売車で定期的に出向く活動などが紹介され、人々をつなぐ活動について活発な意見交換がおこなわれた。



「福祉フォーラム2014 わかち合いのまちづくり」を開催

2014年12月、障がいとはたらき、寺院、環境などを起点として、各地で地域の人々や組織とつながりながら「まちづくり」に取り組む実践者の方々をシンポジストにお招きし、「福祉フォーラム2014」を開催した。様々な人達がそれぞれの役割を持ちながら暮らしていける豊かな「まちづくり」のあり方について考える機会となった。



瀬田キャンパス樹心館が登録有形文化財に登録

瀬田キャンパスの礼拝堂「樹心館」が、登録有形文化財(建造物)に登録された。樹心館は、1885年に大阪南警察署庁舎として建築され、その後3度の移築を経て1994年に瀬田キャンパスへ移築された。「当初の外観がよく保持され、その命脈を保ってきた歴史的経緯とともに、希少な明治期の警察署の遺構として擬洋風建築の趣を現在に伝える貴重な遺構」と評されている。



「龍谷ソーラーパーク」の取り組みがグッドデザイン賞受賞

「龍谷ソーラーパーク」の取り組みが、「都市づくり、地域づくり、コミュニティづくり部門」において、社会的投資を活用し持続可能な地域社会を構築する事業モデルとして高く評価され、「グッドデザイン賞」を受賞。

龍谷ソーラーパークは、龍谷大学が和歌山県印南町、(株)京セラソーラーコーポレーション、(株)PLUS SOCIAL、トランスバリュー信託(株)と連携して設置。



校友会女子会「龍Ron(ロンロン)小町」が歌舞伎観劇イベントを開催

校友会女子会「龍Ron(ロンロン)小町」は、「1月新春歌舞伎観劇と歌舞伎役者片岡愛之助さんとの昼食会」を開催。昼食会では、愛之助さんから、歌舞伎にまつわる裏話など興味深いお話を聴くことができた。その後は「四代目中村鴈治郎襲名披露・壽初春大歌舞伎」を松竹座の中央席で鑑賞するなど、盛りだくさんの一日となった。



2015年度推薦入学試験(専願)合格者対象「入学準備サポートプログラム」を開催

有意義な大学生活を体感してもらうとともに、入学後の学修意欲の向上、入学に対する不安の解消を図ってもらうため、推薦入学試験(専願)合格者対象に「入学準備サポートプログラム」を2012年度から実施している。今年度は、12月25日、26日(深草キャンパス)、26日(瀬田キャンパス)で開催し、868名の入学試験合格者が参加した。



写真は山口県との協定締結

岡山県、山口県、石川県と就職支援に関する協定を締結

龍谷大学は、2014年10月28日に岡山県、2015年1月26日に山口県、1月30日に石川県、それぞれの県と就職支援に関する協定を締結した。自治体との締結は今回の3県で12県目となり、本学が推進している就職支援を通じた地域活性化の取り組みが広がっている。



写真は1月におこなわれた記者会見

学校法人龍谷大学と学校法人平安学園が法人合併

第5次長期計画における諸改革の一環として、学校法人龍谷大学(理事長:石上智康)と学校法人平安学園(理事長:桑羽隆慈)との法人合併については、2014年7月31日に開催され、両理事会・評議員会において、両法人の法人合併に伴う「合併契約書」の締結について決議した。2015年1月6日付けで文部科学大臣から正式認可を受けた。

08 | People, Unlimited

龍谷人

20の資格を持つ よしもと芸人

漫才師「女と男」

市川 義一さん

よしもと芸人「女と男」の“市川”こと市川義一さん。人なつこい笑顔に、フレンドリーな語り口。あっという間に人をリラックスさせるチャーミングな雰囲気をつくりだす。さすが芸人さん。いや、市川さんならではの持ち味なのだろう。

相方の“和田ちゃん”とコンビを結成して、今年で12年。「よしもと漫才劇場」(大阪)、「よしもと祇園花月」(京都)での劇場公演に加え、MBS「ちちんぷいぷい」、関西テレビ「よ〜いドン!」などテレビのレギュラー番組でも活躍している。漫才の芸を磨きつつ、資格取得、自主制作インターネットラジオの配信、福男やマラソンへの挑戦、モノマネ芸など、次々に新しいフィールドを開拓してきた。

中学時代から心斎橋筋2丁目劇場に通うお笑い好き。芸人への憧れはあったが、淡く想う夢にすぎなかった。それを現実の目標に変えてくれたのが、龍谷大学での出逢いだった。同じように芸人を夢見ていた友人と意気投合し、吉本のオーディションを1年間毎月受け続けて、4年生の7月に合格。在学中に漫才コンビ「ひじき」としてデビューを果たす。卒業までの数カ月は夢中だった。後ろ髪を引かれつつも予定通り就職し、相方は警察官に、市川さんは金融系の企業に。だが「やっぱりお笑いがやりたい」。3カ月で会社を辞め、ステージで見そめた“和田ちゃん”を誘ってコンビを組んだ。

しかし簡単に芽が出る甘い世界ではない。鳴かず飛ばずの3年間。両親に「30歳までやってダメなら諦めろ」と言われながら、アルバイトで生活をつないだ。相方の和田ちゃんともケンカばかり。天王寺の歩道橋の上でとっくみあったこともある。「もうやめよか」。相方のお母さんが仲裁して励ましてくれた。「もう少しだけやってみたら」

風向きが変わったのはその直後だ。ピンチヒッターの仕事で好評を得、そこから仕事が増えたのだ。ステージに加え、テレビの仕事もレギュラーになった。ただ、コンビの仕事よりも、相方の単

独出演が圧倒的に多くなっていった。「和田ちゃんは忙しくしてるのに、僕はひま。それではもったいない。何かしなければ」。ちょうどその頃、元よしもと芸人のファイナンシャルプランナーと出会った。経済学部出身、ゼミは国際経済学の市川さんは、「よし、これだ」とファイナンシャルプランナーの資格取得を一念発起。見事合格を果たし、資格取得の楽しさに目覚めた。

「努力すればしただけ、必ず結果が出る」。明確な手応えにやりがいを感じ、そこから次々と資格を取得する。家電製品アドバイザー、チーズ検定から定年力検定まで、今や20の資格ホルダーだ。それが評判になり、最近ではファイナンシャルプランナーの資格を活かした「お笑い資金運用術」セミナーライブという、市川さんならではの仕事依頼も来るようになった。

今も毎週続けているインターネットラジオの自主制作と配信をスタートしたのもこの頃なら、そのロケ企画として西宮神社の福男選別に毎年挑戦するようになったのもこの頃だ。レールのない自由な仕事ゆえの不安は、市川さんをじっとさせない。人から「似ている」と言われたのを機に、芸能リポーター井上公造さんのモノマネもはじめた。自称“井上小公造”。そんな市川さんに、本家井上さんはずいぶん目をかけ、自身の出演番組に呼んでくれることもあるほどだ。

今後の目標は、恩返しと漫才だ。

「先輩達にしてもらったことを、後輩達に返していきたい。そうできるになりたい。それから、やっぱり本筋の漫才を大事にしたいですね。和田ちゃんと二人でやる漫才を」

もう一つ、今のささやかな野望は「龍谷大学で“お笑い資金運用術”セミナーをやること」だという。「龍谷大学に行っていなければ、今の僕はなかった。母校に何か少しでもお返しできれば」

人の縁への感謝と真心をもって、市川さんは今日も前を向いて走りつづける。



いちかわ よしかず 1980年大阪市生まれ。経済学部2003年卒業。在学中に吉本興業のオーディションに合格し、デビュー。卒業後は金融業界に就職するも3カ月後に退職。2003年に「男と女」結成(2008年「女と男」に改名)。20の資格を持つ。2011年結婚。愛妻家。一児の父。2014年10月、母校龍谷大学の学園祭・瀬田龍谷祭に出演。

08 | People, Unlimited

龍谷人

紙芝居ライブでつながる 笑顔と夢

新感覚紙芝居「よしととひうた」
音楽担当シンガーソングライター

持田 陽平さん



鳥根県松江市のとある保育園。舞台には懐かしい紙芝居のとびら。子ども達の歓声に包まれて登場したのは紙芝居屋のおじさん…ではなく、Tシャツにニット帽の紙芝居作家「よしと」と、ギターを抱えたシンガーソングライター「ひうた」。ギターとハーモニカの音色、足首で鳴らす鈴。よしとの個性的な歌声が重なり、「よしととひうた」のライブが始まった。よしとの呼びかけに子ども達が応え、紙芝居が進む。会場は総立ちで手拍子、大合唱。おとなもそのポジティブで優しさあふれる音楽と言葉と絵に心をつかまれた。

「ひうた」こと持田陽平さんは、本学在学時代18歳のときに音楽と出会った。友人が何気なくギターで弾いてくれたオリジナル曲に感動したのがきっかけ。「僕も、心動かす曲を作りたい」。音楽に関心のなかった自分が、初めてギターを学び、バンド活動に明け暮れた。

大学卒業とともにバンドも卒業し、持田さんは鳥根に戻りサラリーマンに。しかし笑顔になれない自分がいた。「毎日ストレスを溜めて帰宅し、こんな父の姿を見て、子どもはおとなになりたいと思

えるのか」と…。「自分は好きなことに挑戦して生きていきたい」。同じ頃、誰かに「音楽なんて趣味でやっとならいいんだよ」と言われ、腹が立ち涙が止まらなかった。自分の想いの深さに気づいた。

持田さんは7年のサラリーマン生活にピリオドを打ち、音楽の道に進むことを決めた。子ども達に「お父さん、やろうと思ってたけど、やらなかった」とだけは言いたくない。失敗したら正直に「挑戦したけど駄目だった」と伝えよう、と。その頃に出会ったのが紙芝居作家の「よしと」こと原田泰人さん。原田さんは絵本の出版記念展覧会で、音楽付きの読み聞かせをやってみようと、ギターのできる持田さんに声をかけた。自分達の表現が、リアルな子ども達の笑顔とつながったことに幸せを感じた。1回きりのつもりが「またやってほしい」と声がかかり、持田さん達は絵本読み聞かせと音楽を組み合わせたライブ活動を始めた。

当初、読み聞かせや教育の専門家から指摘があった。「子ども達の想像力を刺激すべき、淡々と読むべき、音楽も要らない」と。でも、自分達だけの全く新しい形をつくり上げたかった。悔しさを



バネに、読み聞かせから紙芝居に変え、音楽もどんどん入れ、役を演じることも入れ…。生計はアルバイトで立てながら、「よしととひうた」の独自のスタイルを磨いていった。

3年目にもう一つの転機がやってくる。「いつのまにか収入源のバイトを優先している自分達に気づき、『これじゃ本末転倒、作品もライブも増えない』と思った。僕はついにバイトも辞め、よしとにも辞めてもらい、とにかく作品作りをしてよと。僕はチラシを持って全国あちこち歩いて営業活動を始めました。お互いの奥さんも無職でしたから、両家族全員無職という崖っぷちに(笑)。でも不思議なもので、その後いろんな話が舞い込むようになりました」

気持ちがすわったら、年を追うごとに仕事が増えていった。昨年の年間ライブ本数は全国約150本。メディアの取材も後を絶たず、5月には初めての海外公演であるカンボジアでのライブも実現。地元島根ではすっかり人気者。CDや絵本やグッズは、自分達が把握できる分だけ作って、ライブ会場など顔が見える範囲で販売する、そんなやり方が彼らしい。2015年で活動9年目、今で

は二人とも3児の父となった。迷いのない表情で持田さんは若者へのメッセージを語る…。

「想いを持ち続ければ、アンテナが張られ、いろんなチャンスをキャッチできる。また、自分一人の力では難しいことが多いけれど、僕はよしととの出逢いがあったからこそ前に進めた。家族や友人の絆や出逢いを大切に、夢への火を絶やさないで」

紙芝居を通して生まれる子どもの笑顔は、おとなを笑顔にし、全てをつなぐ力があると持田さんは言う。「仕事しながら自分が感動させてもらって、ありがたい」と。今日もまたどこかの紙芝居ライブで、子ども達の笑顔が咲いているだろう。

もちだ ようへい 1977年島根県松江市生まれ、大根島育ち。1999年経営学部卒業。2006年夏に、紙芝居作家「よしと」と組み、新感覚紙芝居ユニット「よしととひうた」活動開始。作曲・ギターを担当する。島根を拠点に全国各地でライブを展開。絵と音楽を通して生まれる、笑顔のコミュニケーションを大切にしている。

<公式ホームページ> <http://yoshitotohiuta.net/>
シンガーソングライター森田さやかとのユニット“マイトリ”としても活動。

08 | People, Unlimited

龍谷人

ラオスでの活動を通じて 世界の可能性の格差を 埋めたい

好岡 利香子さん

インドシナ半島の中心に位置するラオス。人口はわずか677万人と埼玉県より少なく、マーケットも小さい。めざましい成長を続けるASEAN諸国の中、今一つ話題にのぼらない国がラオスなのである。そんなラオスでの活動を学生時代から続けているのが好岡利香子さん。

高校時代に貧困問題に関心を持った好岡さんは、大学進学と同時に学生国際協力団体『SIVIO』に参加した。副代表として現地の子どものために教育支援活動を精力的におこない、引退後はラオス製品を使った事業の立ち上げにも挑戦したという。ラオスで活動する理由を「勝手な使命感です(笑)」という好岡さん。彼女はなぜ、ラオスに魅せられたのだろうか。

「ラオスって可能性がたくさん埋もれてしまっている国なのです。例えば有名なタイシルクは、ラオス産の生糸を使ってラオスで織られていることも多くあると言われています。でもそれらをタイが買い付け、タイの工場で製品化して世界に出荷するので『タイ産』になっていることを現地の活動を通して知りました」

世界有数の生産量を誇るベトナムコーヒーも、3〜4割はラオス産のコーヒー豆が使われていると言われています。しかし、パッケージはベトナム企業がおこなうので『ベトナム産』。

良いものを作っているのに、ラオスの製品として注目を浴びるチャンスが少ない。ブランド価値が付かないため、価格も上がらず労働賃金も隣国に比べ低い。そんな現状を学生時代に目の当たりにした好岡さんは、「もったいない。ラオスの良さをもっとたくさんの人に発信していきたい」という使命感に燃えた。

そして大学4年のときにラオスシルクを用いたアパレル事業とラオス産のコーヒー豆を使ったカフェ事業をおこなった。現地の生産物にこだわったのは、雇用を生み出すためだ。『SIVIO』の活動を通して感じたのは、教育の機会を創出しても、なかなか教育

の必要性を感じてもらうのは難しいということ。教育と雇用の二軸を同時に進めていく必要があるという。しかし、好岡さんの事業はすぐに失敗してしまったそう。

「ラオスの染色や織物について学び、現地の工場に飛び込みで営業していました。熱意は人一倍あっても、所詮はビジネス経験もなければ、ラオス語も満足に話せない女子大生。パートナーとして選んだ現地の人との関係を上手く築くことができず、事業からは手を引くことになってしまいました。悔しい思い出ですが、経験できたことは宝物。根性は養われましたね」

卒業後は国際協力の仕事に就こうと考えていた好岡さんだが、この失敗を経験したことから経営とブランディングを学びたいと、あえて一般企業への就職を選択した。現在は(株)リラクの広報として情報発信力を鍛えながら、同社の企業理念とシナジーのある、ラオスコーヒーを使用したCSR事業の立ち上げも企画中。ラオスへの思いを温めながら新社会人として修行中だ。

どうしてラオスにそんなにこだわるのですか、と聞いてみるとこんな答えが返ってきた。

「関係のない遠い国の支援よりも、困っている身近な人を助けるべきでは、なんて批判されることもあります。でも縁があって出会った人達の力になりたいと思うのは自然なこと。私は在学中に何度もラオスに行って、いつしかラオスにすっかり愛着を持ってしまいました。電気がないから夜は真っ暗、メコン川でお風呂に入る。そんな生活であっても、プラネタリウムよりも綺麗な星空が見える。笑顔の素敵な人達がいる。そんなラオスが好きだし、一緒に何かしたいって思うんですね。私の最終目的は、『世界の可能性の格差を埋めること』。世界が平等である必要はないけれど、どの人にも可能性だけは平等にある社会であってほしい。そのためにこれからも活動していきたいです」

stretch

ZERO-

I ♥

tre



Open House
Term



よしおか りかこ 1991年大阪府生まれ。2014年国際文化学部卒業。在学中よりラオスの教育支援をおこなう学生国際協力団体『SIVIO』の副代表を務めるほか、ラオス原産のシルクやコーヒーを使った事業を手掛ける。2014年4月、ヘルスケアをドメインとしたダブルプラットフォーム事業を展開する株式会社リラクに入社。現在は広報として実務の中でブランディングを学びながら、ラオスコヒーを用いたCSR事業を企画中。

龍谷大学学長
赤松 徹眞

平成23年の学長就任以降、新たな大学像を実現するための「第5次長期計画（以下、5長）」として、各部署の施策を果敢に推進してまいりました。この度、再び学長に就任することが決まり、あらたに2年間の挑戦する時間を与えられたことを大変ありがたく、また光栄に存じます。

これまでの活動を振り返りますと、5長の最も大きな課題であった農学部開設の実現や国際文化学部の深草キャンパス移転が無事にスタートを切り、本学はいっそう知性と活気にあふれる大学になりつつあります。また、“You, Unlimited”のスローガン、イメージカラーの刷新といったブランディング活動も3年目を迎え、社会に発するメッセージが広く浸透したことから、本学への入試志願者はこの3年間右肩上がりとなりました。このような対外的評価の向上には、大学として社会の期待に沿えているという確かな手応えを感じております。

しかし、大学を取り巻く環境が激変するなかで、未来を開拓する力を持った人間を育成するという使命を全うするためには、これまでの諸活動をいっそう改革し、本学こそが担いうる役割を明確に打ち出さなければなりません。そのための取り組みの一つ目として注力するのが“教育の質の向上”です。欧米と比べて日本の大学生の学習時間が著しく短いことは統計でも明白な事実です。本学でも教職員が教育力の向上に積極的に取り組む

と同時に、学生自身にも主体的に学習量を増やすことで質の向上をめざすよう呼びかけてまいります。国際学部のグローバルスタディーズ学科は「日本で最も勉強する学科」というフレーズで、高いレベルの教育達成をめざしておりますが、これは他学部の学生にも良い刺激と影響があるでしょう。“龍谷大学は日本で一番勉強する学生が集う大学である”。そんな評価が得られる大学が実現すれば、2018年以降の少子化という構造的課題をも乗り越えていくことができるはずです。

二つ目は“豊かな人間性を持った学生”の育成です。今の社会はインターネットのような一方通行のコミュニケーションが急激に増えたことで、相手のことを想像することのない、単純化した人間理解が蔓延しているように思われます。そのような時代だからこそ、本学の建学の精神にある、人間の複雑さをいかに理解していくかという普遍的な人間の在り方を探る教育が重要であると考えます。

可能性を開き続けていくためには、伝統を継承しつつ、謙虚で真摯な態度で現代と向きあう姿勢が重要です。まずは学長である私が先頭を切り、情熱と使命感を持って着実に諸施策を進めてまいります。



文学部長
入澤 崇 教授
任期:2015.4.1～2017.3.31

時代に流されることのない 「確かな眼」を養う

1990年に文学部に着任。昨年度まで龍谷ミュージアムの館長をつとめていました。専門は仏教文化学で、アジア各地に展開した仏教文化の様相を研究しています。人文系学問は人間の本質を探究します。将来どのような道に進んでも、生涯にわたって探究し続けることが可能です。社会変動が激しい時代であればこそ、時代に流されることのない「確かな眼」が必要となります。本学文学部の教育はその「確かな眼」を養うことをめざします。



経営学部長
鈴木 学 教授
任期:2015.4.1～2017.3.31

カリキュラム改革実現に向けて

2008年4月に経営学部着任後、学部教務主任及び評議員を歴任し、このたび2015年度より経営学部長の任にあたることになりました。専門分野は会計学で連結会計論の授業を担当しています。経営学部では、社会・経済の環境変化を看過することなく教育内容に反映させるために、現在カリキュラムの再検討をおこなっています。任期中には、ゼミ改革の制度化の実現とともに講義系科目再編の合意形成をめざしたいと考えています。



政策学部長
石田 徹 教授
任期:2015.4.1～2017.3.31

グローバルな視野を持ち、地域の課題を解決しう「地域公共人材」を育成

1979年度に法学部に着任。2011年度に政策学部へ移籍。移籍後は政策学研究科長、地域公共人材・政策開発リサーチセンター長を歴任。専門分野は、政治学、福祉・雇用政策研究です。政策学部は、開設されて4年がすぎ、新たな発展の時期を迎えます。現代において生起する諸問題を多様な切り口から解明しながら、実践的な解決策を探ろうとする政策学をより発展させ、グローバルな視野を持ちつつ地域の課題を解決できる“地域公共人材”をより多く育てていきたいと考えています。



理工学部長
松本 平 淳太 教授
任期:2015.4.1～2017.3.31

高い倫理観を備え、 確かな理工系基礎学力、 専門学力を身につけた人材を育成

1992年に理工学部に着任。研究主任、科学技術共同研究センター長、教務主任、評議員を歴任。専門分野は応用数理、特に超離散系が最近の研究課題です。学部・研究科はこれまで理工系グローバル人材育成プログラムの構築に取り組んできました。今後はそれに加え、高等教育機関として「質の保証」を担保するための仕組みを、理工系オンラインテスト・学習システムなどを活用することによって構築していきたいと考えています。



社会学部長
村井 龍治 教授
任期:2015.4.1～2017.3.31

「現場主義」をキーワードにした カリキュラムの発展をめざして

1992年に社会学部に着任。教務主任を3期歴任し、2003年に社会学部長に就任、2005年に入試部長を3年務め、この度2度目の社会学部長を務めます。専門は障がい者福祉、仏教福祉です。今は特に、ダウン症児童、医療的ケアの必要な障がい児やその保護者の方々が地域で抱える問題解決に向けて研究と実践に携わっています。社会学部のスローガンである「現場主義」をより発展させて、学部運営にも活かしていきたいと思っています。



短期大学部長
阪口 春彦 教授
任期:2015.4.1～2017.3.31

本学で学ぶことに誇りを感じ、 卒業後も誇りに思えるように

1997年に短期大学部に着任し、研究主任、教務主任、評議員、ボランティア・NPO活動センター長などを歴任しました。また、2007年度には国外研究員として南アフリカのクワズール・ナタール大学に留学しました。専門は、ソーシャル・ワーク、社会福祉教育、国際福祉です。学生が本学で学ぶことに誇りを感じ、卒業後も本学で学んだことを誇りに思えるように、大学・学部運営に当たりたいと考えています。



実践真宗学研究科長
深川 宣暢 教授
任期:2015.4.1～2017.3.31

3年制のカリキュラムで 実習をふまえた実践と理論を 統合できる宗教的実践者

龍谷大学宗教部主事、短期大学部特任教授などを経て文学部に着任。2009年4月に実践真宗学研究科が開設されたときから関わり、2013年度から研究科長補佐をつとめました。専門は真宗学ですが中でも真宗伝道学、真宗教義学を中心に研究しています。不安な要素を多くかかえた現代社会において、人々の幸せのために生きることが自身の幸せになるのだという、大乘仏教の精神を生きた宗教者が育ち、活躍できるように、プログラムや学修・研究の内容を充実させてまいります。



法務研究科長
本多 滝夫 教授
任期:2015.4.1～2017.3.31

法曹養成の責任を果たし、 明日に架ける

2001年4月に法学部に着任し、2005年4月の法科大学院設置に伴い異動し、現在に至っています。専門は、行政法学です。5年も後半期に入り、これからポスト5長につながる、重大な任務を負う大学執行部の一員となることの責任の重さを痛感しています。法科大学院では、廃止後も修了生を法曹として養成する課題、これまで法曹養成において築いてきた成果を大学全体の資産として継承する課題などがあります。全学の方々のお力添えの下、法務研究科長の任を全うしたいと思います。

10 | Book Cafe

新刊紹介

＊値段は全て税込価格で表示

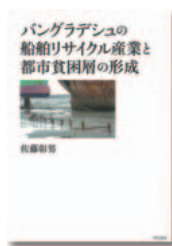
＊Book Cafeについては龍谷大学学長室（広報）まで

01

出版助成

『バングラデシュの船舶リサイクル産業と都市貧困層の形成』

佐藤 彰男(社会学部教授) 著者



21世紀に誕生した巨大都市の多くは、アジアの途上国に位置している。本書では、後発途上国といわれるバングラデシュの、船舶リサイクル産業で働く底辺労働者を対象とした調査の結果から、「貧しいまま巨大化していく」都市の仕組みの一端を明らかにしようと試みている。

2014年9月刊／217頁／明石書店／4536円

02

出版助成

『Maximaによる経済分析』

山下 章夫(経営学部教授) 著者



本書はフリーの数式処理システムMaximaを、経済分析に利用したものである。各章では、実装されている関数を利用して、行列計算、微積分、最適化、差分方程式、微分方程式などの計算をおこなっている。本書は第1部(第1章－第5章)と第2部(第6章－第9章)の2部構成となっている。第1部では経済静学、第2部では経済動学に関する内容を取り上げている。

2014年10月刊／314頁／晃洋書房／4860円

01

共同研究活動

龍谷大学仏教文化研究叢書33

『日本文学とその周辺』

大取 一馬(文学部教授) 編者



この研究叢書は、仏教文化研究所の指定研究「龍谷大学図書館蔵中世歌書の研究」を推進していくなかで問題となった諸点や、各研究員がこれまで温めてきた問題を論文にまとめ、それを文学篇、書誌・出版篇、歴史・思想篇の三部に分けて一書にしたものである。古代から近代までの21編の論文を収めている。

2014年9月刊／626頁／思文閣出版／9072円

02

共同研究活動

龍谷大学国際社会文化研究所叢書第17巻

『「多文化共生」を問い直す－グローバル化時代の可能性と限界』

権 五定(国際文化学部教授)・斎藤 文彦(国際文化学部教授) 編著、清水 耕介(国際文化学部教授)・鈴木 滋(国際文化学部准教授)・嵩 満也(国際文化学部教授) 著者



今日、グローバル化社会の望ましい方向あるいは状況を示すことばとして「多文化共生」が広く使われている。一方、排他的運動・衝突・紛争・テロが頻発している現実を目の当たりにしている。本書は、「共生」という理念・理想の裏に隠されている多数強者による仕掛けを見抜き、少数弱者の主体性が尊重される仕組みを考えていく上で、必要な視座を探るものである。

2014年9月刊／269頁／日本経済評論社／3024円

01

みんなの本棚

『なごりの桜』

～38歳・咲子が独身とさよならするまでの日々～

樹 直弥(1979年度経営学部卒業／滋賀県) 著者



38歳になる教師咲子は、学校現場で様々な問題と向き合い日々奮闘する。女性としての生き方にも思い悩み、揺れ動く姿を共感的に描く。

2014年9月刊／312頁／文芸社／864円

02

みんなの本棚

『THE WASAN(REPRINT) I』

親導釋瑞峰(1969年度大学院文学研究科博士課程修了／僧侶／兵庫県) 著者・『和讃』翻訳『選択集』編集



『和讃』に曰く「佛光照耀最第一 三塗の黒闇、開くなり」と。「一枚安心文」(P.9)の冒頭に「地獄の底まで貫いて護っておるぞ」と。これがこの本の骨子であります。全10巻発刊の『和讃シリーズ』のうち、第1巻の再版本。

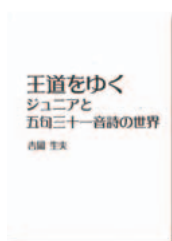
2014年8月刊／241頁／探究社／2376円

03

みんなの本棚

『王道をゆく ジュニアと五句三十一音詩の世界』

吉岡 生夫(1973年度文学部卒業／歌人／兵庫県) 著者



五句三十一音詩史に日本語史を重ねることによって、王道としての言文一致歌をジュニアの作品でたどり、近世は言語体の狂歌の再評価に努めている。

2014年10月刊／160頁／ブイツーソリューション／1080円

04

みんなの
本棚

『阿闍世のすべて―悪人成仏の思想史』

永原 智行(1983年度文学部卒業/
教専寺住職/和歌山県)著者

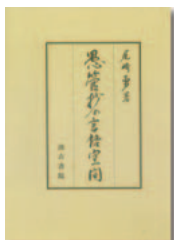
父親殺しの阿闍世が登場する仏教文献を博搜して、親鸞聖人によって悪人正機の教えが確立するまでのプロセスを考察した書物である。

2014年9月刊/318頁/法蔵館/3240円

05

みんなの
本棚

『愚管抄の言語空間』

尾崎 勇(1971年度大学院文学研究科国文学専攻修了/
熊本学園大学教授/熊本県)著者

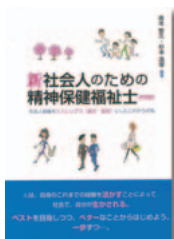
本書は、慈円が扶持していた信濃前司行長が『平家物語』を作ったとする『徒然草』二二六段の平家成立説を起点に、『愚管抄』をはじめとする慈円の言説や和歌、及び比叡山延暦寺の別所である西山の空間をめぐる慈円の人的ネットワークから、『治承物語』を創出する慈円圏を推定し、『平家物語』生成に新機軸を打ち出すものである。

2014年3月刊/720頁/汲古書院/18900円

06

みんなの
本棚

『新社会人のための精神保健福祉士(PSW)』

青木 聖久(2011年度社会学研究科 社会福祉学専攻
博士後期課程修了/日本福祉大学教授/愛知県)編著

社会福祉専門職である精神保健福祉士は、社会人経験が役立つ。本書は、社会人のストレングスに着眼し、自分自身の活(生)かし方について迫る。

2014年5月刊/356頁/学文社/1944円

07

みんなの
本棚

『農民作家 上泉秀信の生涯』

中山 雅弘(1978年度文学部卒業/
いわき市生涯学習プラザ副館長/福島県)著者

都新聞(東京新聞)の文化部長として、小林多喜二や尾崎士郎ら若手作家を育て、みずから劇作家として活躍した農民作家・ジャーナリストの生涯を描く。

2014年7月刊/260頁/歴史春秋社/1620円

08

みんなの
本棚

『西洋の欲望 仏教の希望』

大來 尚順(2004年度文学部卒業/
翻訳家・僧侶/山口県)翻訳

仏教の智慧とアメリカ社会という二重のレンズを通して、西洋化しつつある日本社会を見つめ直す視点を私達日本人に養ってくれる本です。

2014年12月刊/311頁/サンガ/3024円

09

みんなの
本棚

『英語でブッダ』

大來 尚順(2004年度文学部卒業/
翻訳家・僧侶/山口県)著者

中学生レベルの英語を復習しながら、仏教の教えで心がみるみる癒やされていく、新しいカタチの仏教本。

2015年1月刊/187頁/扶桑社/1404円

10

みんなの
本棚

『日本のこよみ』

井上 博道(1953年度文学部卒業/写真家)共著



12年12月逝去の写真家・井上博道さん(92年龍谷賞受賞)の遺作を千鶴夫人が整理し、夫人によって四季のエッセイがちりばめられている。あとがきには「被写体に対する博道の眼差しが一点一点のフィルムから伝わってきます。(中略)本当に写真が好きでな人でした」と。

2014年9月刊/232頁/パイインターナショナル/1944円

11

みんなの
本棚

『潜入ルポ 東京タクシー運転手』

矢貫 隆(1976年度経営学部卒業/ノンフィクション作家/
東京都)著者

安心・安全を標榜する公共交通機関・タクシー。だが実態や、いかに?ノンフィクション作家自らハンドルを握り、デフレ不況下の東京を走り抜けてわかった事故・売上げ・道路案内、そしてお客の悲喜こもこも!エッ!なぜ?まさか!驚天動地の数々。

2014年12月刊/248頁/文藝春秋/864円

01:『韓国高等学校検定教科書 『日本語I』』

泉 文明(国際文化学部教授)著者・監修

韓国教育部に検定採用された、高等学校日本語教科書である。日本語の4技能のバランスのとれた習熟をめざす。全10課には日本文化も紹介されている。
2014年8月刊／255頁／EDUSEOUL／¥10,000

02:『Multiculturalism and Conflict Reconciliation in the Asia Pacific:Migration,Language and Politics』

清水 耕介(国際文化学部教授)編著

Palgraveから出版されたアフラシア多文化社会研究所の研究成果。
Palgrave初の社会科学系オープンアクセスとして刊行された。
2014年8月刊／237頁／Palgrave/Macmillan／非売品

03:『岩波講座日本歴史第8巻 中世3』

吉田 賢司(文学部准教授)共著

南北朝から応仁・文明の乱に至る室町幕府の盛衰をたどり、一揆と徳政、所有構造、貨幣・流通、宗教・文化などの切り口から中世後期の日本を描き出す。
2014年8月刊／336頁／岩波書店／3456円

04:『農業問題の基層とはなにか—いのちと文化としての農業—』

末原 達郎(経済学部教授)共著

『シリーズ:いま日本の「農」を問う』の第1巻。文化としての農業の意味を問うたもの。農業のもつ多様な意味を考え、現代社会に訴えかける。
2014年12月刊／304頁／ミネルヴァ書房／2700円

05:『ナイチンゲールの末裔たち

—〈看護〉から読みなおす第一次世界大戦』

荒木 映子(文学部特任教授)著者

イギリスの軍事看護の歴史をたどり、第一次世界大戦中、病院で傷病兵の看護にあたった英米日の女性達と彼女達の見た戦争を浮き彫りにする。
2014年12月刊／256頁／岩波書店／3024円

06:『世界を語る、日本を語る』

角岡 賢一(経営学部教授)共著

大学生向け、読解の英語教科書。中央新幹線や富士山の世界遺産登録、リオデジャネイロや東京の五輪など幅広い話題を集めている。
2015年1月刊／103頁／成美堂／2052円

07:『法典とは何か』

中田 邦博(法科大学院教授)共著

法学入門者に向けて法典を中心とした基礎法学を手引きする入門書。
2014年10月刊／293頁／慶応義塾大学出版会／2808円

08:『La diplomacia de la Segunda República española ante Japón -En torno al Incidente de Manchuria (1931-1933): un análisis de los informes de los ministros de España en Tokio- (『満州事変問題をめぐるスペイン第二共和制の対日外交—在東京スペイン人公使の報告書の分析—』)』

安田 圭史(経済学部講師)著者

1931年、満州を侵略した日本に対しスペイン第二共和制が取った外交姿勢をスペインと日本の文書館に所蔵されている資料を分析し明らかにした。
2014年8月刊／157頁／Editorial Académica Española (Saarbrücken, GERMANY)／€41.90

09:『二楽荘史談』

和田 秀寿(事務職員)編著

浄土真宗本願寺派第22世門主大谷光瑞が、明治末に神戸六甲山中に築いた別荘“二楽荘”。その全貌を追う。
2014年11月刊／400頁／図書刊行会／3888円

10:『大学の教員免許業務Q&A』

小野 勝士(事務職員)共編著

大学における教職課程の履修に際しての疑問に即応できる実践的テキスト。教育実習・介護等体験などのカテゴリ別Q&A、参考資料などを掲載。
2014年10月刊／208頁／玉川大学出版部／2160円

11:『投資取引訴訟の理論と実務[第2版]』

今川 嘉文(法学部教授)著者

ますます多様化する投資商品と紛争解決手続の拡充に対応。論点を厳選し、より有用性を増した最新版。初版を全面的に書きかえた最新の動向を分析。
2014年12月刊／480頁／中央経済社／5616円

12:『国際裁判と現代国際法の展開』

田中 則夫(元法科大学院教授)共著

杉原高嶺京都大学名誉教授の古稀記念論文集。国内外の17人が寄稿。国際裁判制度の現代的展開と、国際裁判による現代国際法の発展過程を分析する。
2014年8月刊／479頁／三省堂／10692円

13:『海外佛教事情・THE BIJOU OF ASIA 復刻版 全3巻』

中西 直樹(文学部教授)監修

明治20年代、普通教校に集った若き仏教者達は、旧態依然たる仏教の閉塞状況を打開する道を模索して、海外へと眼を向けた。今回復刻の海外宣教会の機関誌は、本学進取の学風の源流を伝える貴重な資料である。
2014年8月刊(1・2巻)、2015年6月刊(3巻)／総1078頁／三人社／揃定価97200円

14:『縮小都市の挑戦』

矢作 弘(政策学部教授)著者

破綻都市デトロイトとトリノの再生の試みから、人口減少と産業衰退により「縮小」に直面する都市が「小さく、賢く、成長する」ための政策を学ぶ。
2014年11月刊／270頁／岩波書店／886円

広報誌「龍谷」からプレゼント！

龍谷ミュージアムペア招待券5組10名様
龍谷カレー3個パック5名様



ご希望の方は、はがきにご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号（龍谷大学関係者は卒業年度・学部なども）及び広報誌「龍谷」の感想・意見、あなたの近況などを書き添えてご応募ください。感想や近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。あて先は右の「プレゼント」係まで。

締め切りは5月29日（金）必着。

応募多数の場合は抽選で。当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

広報誌「龍谷」のデジタル環境の整備について

卒業生のみなさまへは、毎年3月と9月に広報誌「龍谷」をお送りしています。昨今、スマートフォンやタブレットなどのデジタル端末が急速に普及するなかで、広報誌「龍谷」は「デジタルブックサービス」を導入し、パソコンやタブレット、スマートフォンなどの端末でもご覧いただきやすくなりました。

<http://issuu.com/ryukoku>

このような状況を踏まえ、2015年9月発行時に「デジタルブックサービス」への切り替えのご希望をお伺いすることとなりました。いつでもどこでもご覧いただけるメリットを最大限に活かして、今まで以上にご覧いただきやすい誌面作りを心がけてまいります。

なお、詳細については、2015年9月発行の広報誌「龍谷」にてご案内いたします。

広報誌「龍谷」79号 読者アンケートのお願い

今後のよりよい広報誌づくりのため、
同封のアンケートにて皆様のご意見をお聞かせください。

なお、アンケートは、
<https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/>
からも回答していただけます。



読者のひろば

78号の「World, Unlimited（ドルトムント工科大学との協働学習プロジェクト）」記事を読み、在学中に自分が行政学のゼミで地方自治や地方都市の公共交通網について学んでいたことを懐かしく思いました。

（1990年卒業生N）

今春の農学部開設は、新聞記事でも掲載されましたし、世間の関心をひくと思います。

今後の発展に期待しています。（1969年卒業生M）

在学生の活躍の記事を読み、娘にも目標にしてみたいと思いました。親としても勉強になる内容が多く、楽しく読んでいます。（在学生保護者I）

在学生の方の体験談や、卒業生の生き方やアドバイスなど、感心させられる話ばかりです。子どもにも話を持ちかけるものの、特別な人達のことのように言ったり、わかっているけれどできないのだと言います。

何かきっかけがあれば…と思っています。

（在学生保護者E）

78号の「龍谷人」に掲載されていた、洲本市議会議員の木戸隆一郎さん。27歳の若さで政治の世界に進出した卒業生がいるとは意外だったので、興味深く拝読しました。（匿名）

お便り待っています

「読者のひろば」へのお便りをお待ちしています。また、「龍谷人」「専門家に聞く」などへの推薦や情報をお寄せください。いずれも以下のあて先まで。

《プレゼント・お便りのあて先》

龍谷大学 学長室（広報）

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話：075（645）7882

FAX：075（645）8692

E-mail：kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

編集委員 新井 潤、安食 真城、生駒 幸子、石田 義憲、
石橋 良太、市川 良文、乾 真理、猪瀬 優理、
岡本 健資、梶脇 裕二、カルロス マリア レイナルス、
佐竹 康輔、若林 雅子、世雄 理博、高橋 正行、
田中 順也、谷村 知佐子、中尾 覚、西倉 一喜、
藤原 直仁、古澤 登美代、遊磨 正秀（50音順）
事務局 増田 滋彦、田中 秀樹、田中 正徳、神野 華奈子

広報誌「龍谷」79号

2015年3月16日発行

編集：龍谷大学編集委員会

制作：龍谷大学学長室（広報）

発行：龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075(642)1111（代表）

龍谷大学ホームページURL

<http://www.ryukoku.ac.jp>



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY